慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	遺跡・遺物観の系譜：「過去」の遺跡・遺物の取り扱いをめぐって
Sub Title	Genealogy of how archeological sites and artifacts have been perceived in Japan
Author	桜井, 準也(Sakurai, Junya)
Publisher	三田史学会
Publication year	2001
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.70, No.2 (2001. 2) ,p.47(195)- 86(234)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20010200-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

遺跡・遺物観の系譜

―「過去」の遺跡・遺物の取り扱いをめぐって―

桜井準也

一　はじめに

日本の考古学は、いわゆる「近代考古学」[1]の始動から、約百二十年が経過した。この間の学問的な発展は決して平坦なものではなく、明治時代中期の「近代考古学」の普及、大正時代の実証的考古学の確立、一九七〇年代以降の大規模開発に伴う発掘件数や情報量の急激な増加、一九九〇年代以降の考古学のハイテク化や新たな自然科学的分析手法の考古学への導入という経過を追うことができる。しかしながら、発掘調査の急激な増加、考古学のハイテク化、自然科学的分析方法の導入といった近年の動向は、考古学自らが望んだものではなく、高度経済成長や情報革命など現代日本社会の変革の波を考古学が直接的に受けた結果であるといえる。その意味で、欧米などの考古学界と比べわが国の考古学界の近年の発展は、考古学という学問的な裏付けに基づくものではなかったといえる。その点は、わが国の考古学史研究に対する態度についても同様であり、現代の考古学研究者にとって考古学史は過去のものであり、学史的記録は現代よりも劣った考古学的知識や理論に基づくものに過ぎないという意識が研究者間に蔓延していることは否めない。

このような中で長年にわたりわが国の考古学史研究を牽引してきた斎藤忠は、考古学史の把え方として、四つの方法を提示している（斎藤忠　一九九〇）。最初は回想的な方法で、発掘・発見の経過や学会の創立などを回想的に談話し、記録することである。二番目は、過去の論文や著述、あるいは人物について批判する方法である。この方法は学問の発展のために必要な方法であるが、その

ためには、その業績が生まれた背景を理解し、その人物について熟知している必要がある。三番目に学史を今後の研究の反省材料として把えることで、過去の研究の過誤や不徹底、感情的な部分を反省することである。最後に、学史を無視することで、自然科学のように学史は過去の形骸にすぎないとする立場である。斎藤の区分は、考古学史を把える方法としての実務的な区分であるが、この中で特に重要と思われる点は、二番目の過去の論文や著述批判の方法の中で、業績の生まれた背景を理解する必要があるとしている点である。つまり、学史に残る様々な記録等を現在の学問的レベルから検討し、評価するのではなく、記録された当時の時代背景やその人物について理解することによって、正当な評価が可能となるわけである。

以上の考え方は、学史的人物や当時の人々が遺跡や遺物をどのように捉えていたかという興味ある問題に発展させることができる。つまり、過去の人々が遺跡や遺物という彼らにとっての「過去」をどう把えていたかという問題を追ってゆくことによってその時代や社会的背景、さらには階層による遺跡観や遺物観のあり方の違いという重要な問題を検討することができる。具体的には、遺跡や遺物に関する文献記録を検討するだけでなく、遺跡や遺物の取り扱い、すなわち破壊や忌避、さらに再利用[2]の事例を検討することによって、遺跡観や遺物観の問題を究明することが可能となる。この点に関して、斎藤は土中に埋もれることなく長期間地上に存在していたり、工事や開墾、大雨の後に洗い出されて人々の目にとまった遺跡や遺物があったとしたうえで、「過去の人々のこのような遺跡・遺物の取り扱いは、学問とは別であるかも知れない。しかし、考古学の発達史をたどるとき、最初にこのような前史的な事柄にも触れておく必要もあろう」（斎藤忠　一九七四：一～二頁）と述べている。しかし、このような事象は決して学問とは別ではなく、遺跡・遺物の取り扱いを検討することは、当時の人々の「過去」の遺跡観や遺物観を探る重要な手がかりとなり得るのである。

このような視点の研究は、ヨーロッパにおいてブラッドリーによる研究（Bradley 1987・1993）があり、一九九八年にブラッドリーとウィリアムスによって『ワールドアーケオロジー』誌の第三〇号に「過去における過去古代記念物の再利用（The Past in the Past: The Reuse of Ancient Monuments）」という特集が組まれ、ヨーロッパ

の巨石建造物が後の時代に再利用されている事例の分析を行い、古代人や中世人の「過去」の遺跡に対する意識について活発な議論がなされている（Bradley and Williams 1998）。このような遺跡の再利用を巡る議論は、九〇年代後半以降の欧州考古学の新たな潮流となっている。

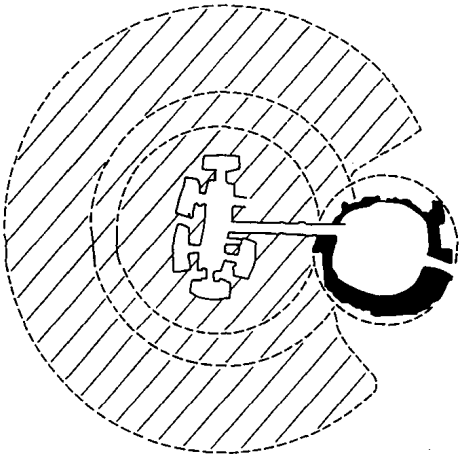
本稿では、わが国の遺跡観や遺物観の系譜を探るという目的で、遺跡や遺物に関する文献記録だけでなく、近年の発掘調査によって当時の遺跡観や遺物観の一端が垣間見れる事例をあげて検討する。この試みは、遺跡や遺物に対して新たな見方を提示するとともに、考古学史の再構築を目指すものである。なお、本稿で触れている近代以前の考古学史上の文献資料については、先学の考古学史に関する主要な著作（中谷 一九三五a、清野 一九四四・一九五四、斎藤忠 一九七四・一九八八・一九九〇、勅使河原 一九九五）を参考とした。

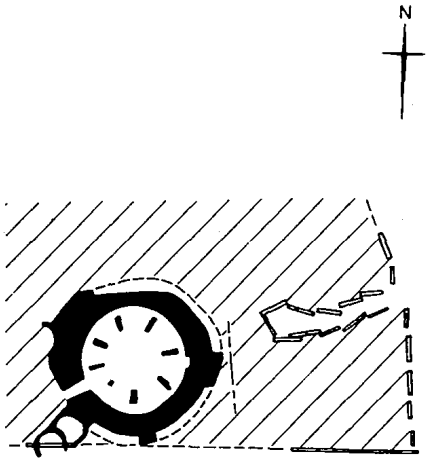
二　遺跡観・遺物観の系譜

（一）先史時代の遺跡・遺物観

先史時代の「過去」の遺跡観を探る材料として、発掘調査によって判明した「過去」の遺跡の破壊や再利用の事例、「過去」の墓地を避けて遺跡が形成される忌避と考えられる事例が存在する。ヨーロッパにおける遺跡の再利用については、既に述べた『ワールドアーケオロジー』誌の第二八号や第三〇号に多くの論文が掲載されている（Hingley 1996, Driscoll 1998, Gosden and Lock 1998, Holtorf 1998, Semple 1998, Williams 1998など）。このうち、ヒングレイ（Hingley 1996）は、スコットランドの新石器時代の石室墓が鉄器時代に破壊されている事例を示し（図1）、これらが墓ではなく祖先の家屋であると解釈された可能性を示している。また、ホルトフ（Holtorf 1998）は、ドイツのメガリスのライフヒストリーについて論じている。そのライフヒストリーは、①誕生・幼児期（新石器時代）メガリスが作られ埋葬地として使用、②若年期（前期青銅器時代）埋葬地として再利用、③成人期前期（後期青銅器時代・鉄器時代・スラブ時代）二次埋葬、内部や近接地に出土遺物、墳丘による被覆、④成人期後期（前期ドイツ期～近代前期）内部や近接地に出土遺物、石材の再利用、⑤老年期（一七五〇年以降）詩人・画家・旅人に鑑賞されたロマン主義の時代および古代史家や考古学者の研究対象となり保護される時期に区分されている。

これに対し、わが国は複数の時期にまたがる複合遺跡





新石器時代の石室墓
鉄器時代の城壁

図1　破壊された新石器時代の石室墓（Hingley 1996 より）
1：Quanterness（イギリス・オークニー州）
2：Cletcaraval（イギリス・北ウイスト州）

が数多く存在するため、先史時代において同様な事例は決して少なくはないと推定されるが、「過去」の遺跡の忌避、破壊、再利用といったコンテクストで遺跡を捉える習慣がなかったため、実際に報告された事例はごく少数である。その一例として神奈川県南足柄市五反畑遺跡の事例（安藤 一九九八）があげられる。五反畑遺跡は縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡であり、調査面積は約一二〇m^2である。このうち、縄文時代の遺跡群は中期中葉から後葉の時期と後期中葉から晩期終末までの二時期に大別されるが、後者の時期には竪穴住居址や敷石住居址の他に立石を伴う配石群や二六基にのぼる石棺墓群が検出されており、石刀・勾玉・土版など豊富な遺物群が出土している。これに対し、弥生時代終末期から古墳時代初頭の時期では、方形周溝墓三基と竪穴住居址三軒が検出されており、当初集落であったものが方形周溝墓を中心とした墓域に変化している。ここで、調査担当者が興味深い点として報告したのは、遺構の分布状況から一辺二〇m近い大型の第一号方形周溝墓が縄文時代の立石を避けて構築されていた可能性が高いという点である。写真から判断する限り、立石は縄文時代の地表面から一メートル近く露出していたと思われ、土層の堆積

状況から考えて弥生時代終末～古墳時代初頭という時期には立石、あるいは石棺の一部は当時の地表面から露出した状況であったと考えられる。この時代の人々が縄文時代の立石や石棺墓を具体的にどのように認識していたかは不明であるが、少なくともそれらの石を移動したり、廃棄したりせずに敢えてそれらを避けて方形周溝墓を構築したこととなる。わが国には複数の時期の住居が重複して検出されることが多いが、居住施設は一般的に地面を掘り込んだ竪穴住居であるため、住居が完全に埋没してしまえばそこにかつて居住施設があったという痕跡は表面的には残されない。つまり、時期が異なる住居同士の「切り合い関係」は生じても、そこから「過去」の時代の住居の存在が認識されていたかどうかを探ることは難しい。その意味で五反畑遺跡の事例は、立石や石棺墓の存在によって判明した忌避事例と考えられ、弥生時代末～古墳時代初頭の人々が縄文時代の立石や石棺墓群の存在を意識していたという貴重な証拠である。

次に、先史時代に「過去」の遺物に対する遺物観を探る手がかりとなる事例が若干存在する。まず、旧石器時代では、明らかにその時代に製作されたものとは異なる「過去」の時代の石器を採集したという事例は今のところ存在しない。しかし、特異な形をした化石や鉱物など自然物が採集され、遺跡に持ち込まれた事例は存在する。その最古の例としてあげられるのは、前期旧石器時代（猿人段階）のタンザニアのオルドヴァイ遺跡から出土した赤色黄土の破片と緑色溶岩の塊である（Clark 1975）。これが中期旧石器時代（旧人段階）になると事例が確実に増える。フランスではムステリアン期のイエンヌ洞窟で、ネアンデルタール人が持ち込んだ腹足類の化石や中世代の球状ポリプ群体の化石および黄鉄鉱の塊が出土している（Leroi-Gourhan 1964a・b）（図2）。同様な事例は、後期旧石器時代（新人段階）の始めのシャテルペロン期、オーリニャック期からマグダレニアン期に至る約三万五千年前から一万年の間にも存在する。集められた化石はアンモナイト、ペレムナイト、三葉虫であり、石英や方鉛結晶、黄鉄鉱も収集されている。このように、ヨーロッパの旧石器時代人は「化石コレクター」や「鉱物コレクター」であったが、中石器時代においても同様の事例が存在する。ドイツのゲナスドルフ遺跡（Bosinski 1981）では、動物の歯の加工品や巻貝の装飾品、化石木製の数珠玉などの様々な装飾品とともに大型住居址の北側部分から古い地層から集められた化石が発見されてい

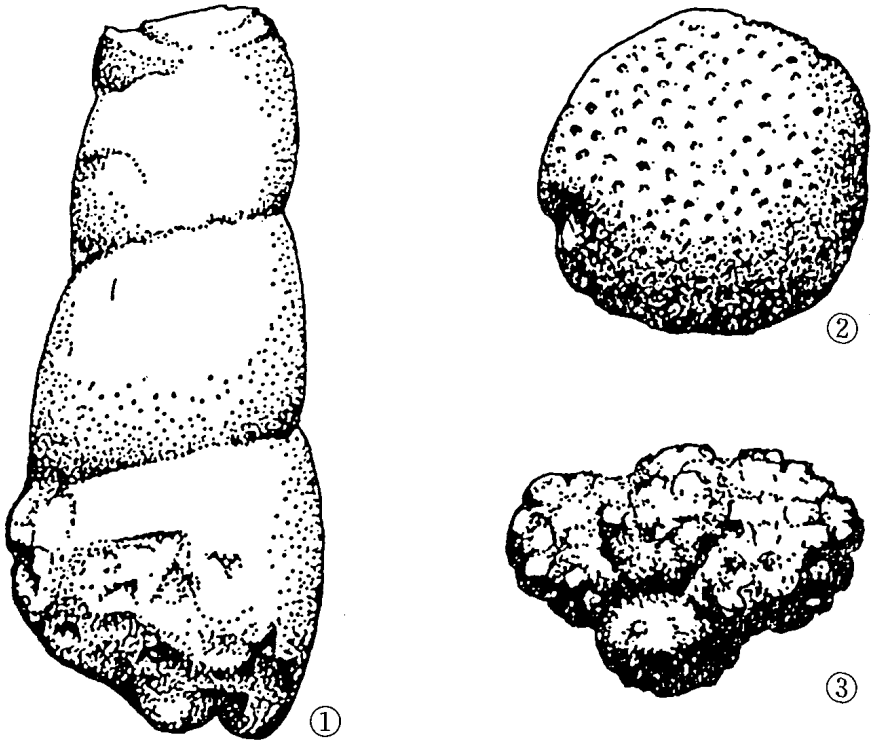


図2　ネアンデルタール人により採集された自然物
（①：腹足類の化石　②：球状ポリプ群体　③：黄鉄鉱塊）

る。一つは遺跡から約九〇キロメートル離れたマインツ盆地から採集されたサメの歯、もう一つは遺跡から約一二〇キロメートル離れたルクセンブルク地方に産出する恐竜の脊椎骨の破片に穴を開けたもの、最後はノイヴィート盆地の古い地層中の毛サイの骨である。また、別の場所ではやはりノイヴィート盆地に産出するペレムナイトが出土している。このように、実用的な道具の素材とはならない化石や鉱物を採集するという行為が旧石器時代まで溯ることは、珍奇なものや神秘的なものに対する旧石器時代人の意識や心性を探るうえで重要な材料となる。しかしながら、彼らの祖先が製作した「過去」の遺物をどのように認識していたかを知ることのできる事例は今のところ存在しない。また、ヨーロッパの旧石器時代人が「化石コレクター」や「鉱物コレクター」であったことは明らかであるが、わが国の旧石器時代には今のところ同様の事例は存在しない。

わが国の先史時代において「過去」の遺物を収集したと考えられる事例は、身近な例では筆者が発掘調査に携わった神奈川県藤沢市の慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の弥生時代末～古墳時代初頭の集落の住居址から出土した縄文時代草創期の有茎（有舌）尖頭器である（慶

應義塾 一九九二)。本遺跡からは約一万二千年前の縄文時代草創期の遺物が遺跡全域から出土しており、当該期の良好な研究資料となっている。この有茎尖頭器は硬質中粒凝灰岩製[3]で先端が少々欠損しているものの、長さ九・三センチメートル、幅二・五センチメートル、最大厚〇・九センチメートル、重量二二・一グラムを計る大形の資料であり、薄緑色で左右対称の整った形状に仕上がっている(図3①)。出土位置は五七号住居址の「床面直上」である[4]。縄文時代草創期の大形の有茎尖頭器がこの時期の住居址の「床面直上」から出土したという理由として、従来であれば住居址が廃絶され埋没する過程で周堤や周辺の土壌中に有茎尖頭器が混在していたと解釈されるが、大形の有茎尖頭器が偶然埋没土壌に紛れ、しかも「床面直上」から出土する可能性は低い。つまり、集落の住人が偶然出土した有茎尖頭器を拾って住居に持ち帰った可能性が高い。この時期に有茎尖頭器が狩猟具として再利用された可能性は低いため、その珍奇性から住居内に持ち込まれたと考えられる。同様の事例は他にも存在すると思われるが、出土遺物がこのようなコンテクストで発掘調査報告書に掲載されることは稀であり、事例の増加は今のところは調査担当者の判断に委ねられ

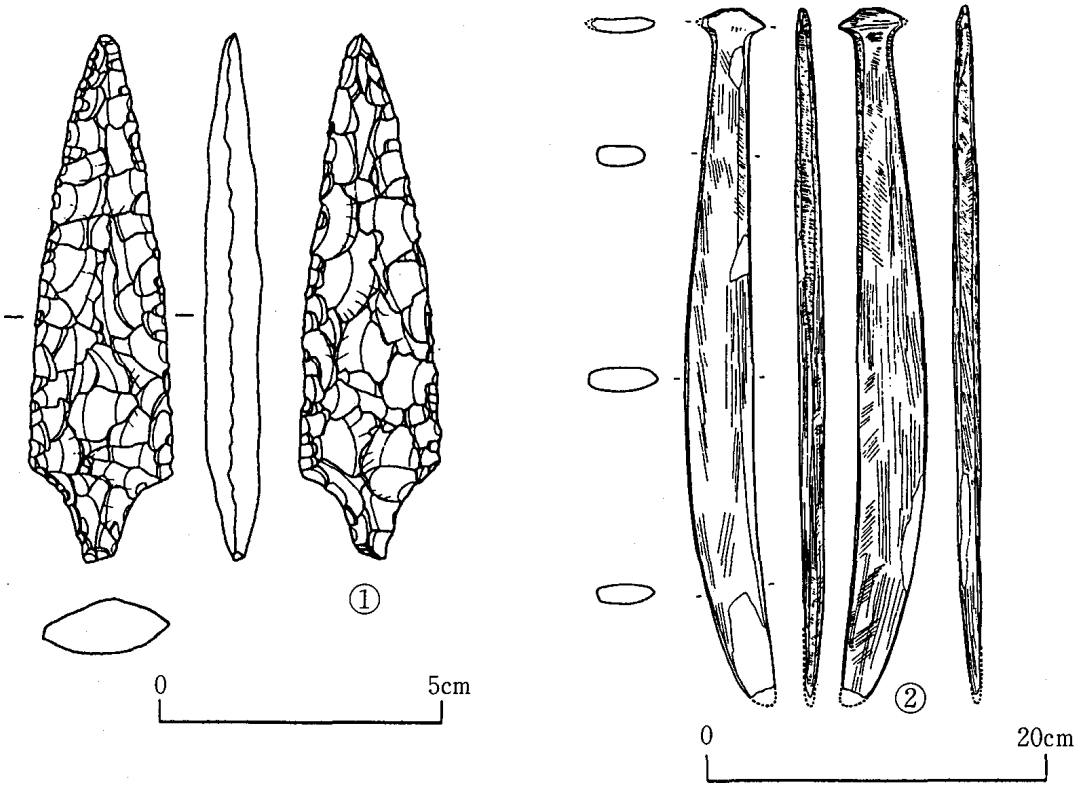


図3　採集された「過去」の遺物
(①：慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡出土有茎尖頭器　②：牡丹畑遺跡出土石刀)

ているのが現状である。

（二）古代の遺跡・遺物観

古代以降の遺跡観・遺物観を探るためには、発掘資料だけでなく文献記録についても検討する必要がある。既に考古学史の中で紹介されているように、遺跡や遺物の発掘や発見に関する記事が幾つかの文献にみられる。このうち、遺跡に関する記載については、古墳に関するものが圧倒的に多い。[5] これは、古代律令制において陵墓の破壊は「八虐」の一つとして厳罰に処され、陵墓に限らず墓暴きは処罰の対象となっていたことからも肯ける。古墳に関する記載のある文献の中で、最も早いとされているのが『続日本紀』の記事である。朝廷は、平城京造営にあたり大形の古墳を破壊したが、その際の措置について『続日本紀』和銅二年（七〇九）十月の条に次のような記事がみられる。

勅二造営平城宮司一。若彼墳隴。見二発掘一者。随即埋歛。勿レ使二露棄一。普加二祭酹一。以慰二幽魂一。

これは、平城宮の造営に際して朝廷が造平城京司に墳丘の発掘の際は露棄せず幽魂を祭るように命じたものであり、墳丘の発見に対する措置が記録されている珍しい記事である。朝廷は古墳の破壊による「たたり」を恐れたと考えられているが、実際に平城京跡の発掘調査によって古墳の破壊が確認されている（奈良国立文化財研究所 一九六三・七四・七六）。例えば、市庭古墳（全長二五〇メートルの前方後円墳）は前方部が削平され、周濠は埋め立てられ、埴輪は葺石上に散乱するか周濠内に落ち込んでいた。同様の事例は藤原京造営、恭仁京造営、長岡京造営の際もみられる。このうち、藤原京造営により破壊された四条古墳（全長約六四メートルの方墳）は完全に削平され、木製葬具、埴輪、土器などは無造作に古墳の周濠に投げ捨てられていた。長岡京造営の際も、舞塚古墳（全長約四〇メートルの帆立貝式古墳）や塚本古墳（全長三二メートルの前方後円墳）（図4）、大路によって前方部と後円部に分断された今里車塚古墳（全長九八メートルの前方後円墳）をはじめ十七基の古墳が壊されたとされている（奥村 一九八六）。また、恭仁京については、古墳が破壊された時期の薬壺形須恵器が出土していることから、その際に祭祀行為が行われていたと指摘されている。このように、築造後数百年しか経ていない時期に大形古墳が破壊された理由として、王 建新は『古事記』や『日本書紀』の記述から古代の天皇が自分の祖先の陵墓を大事

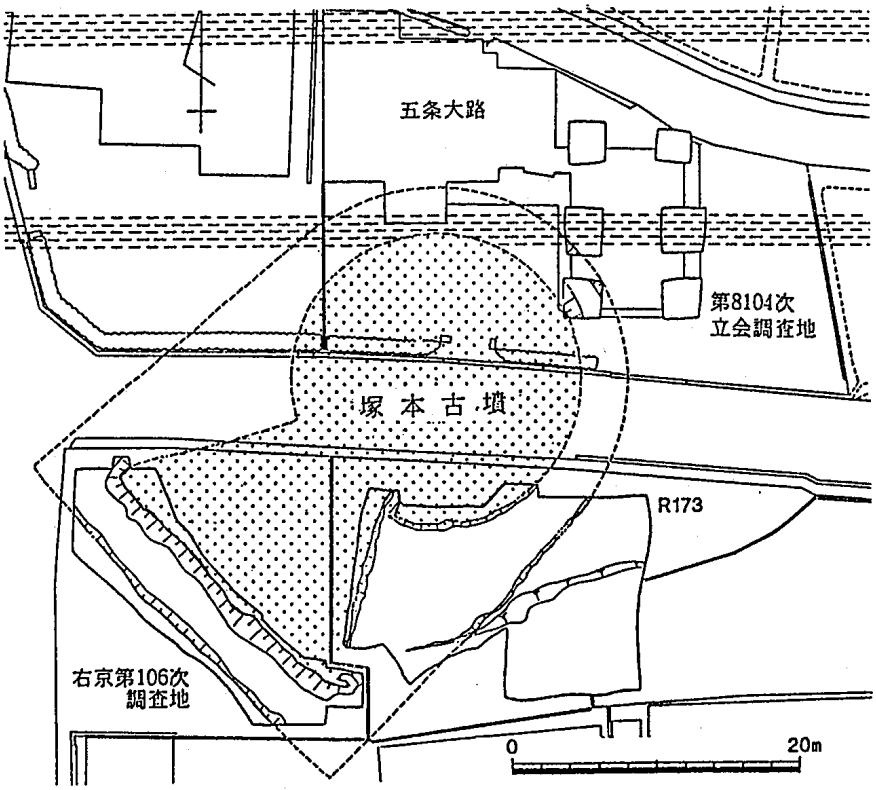


図4　長岡京造営によって壊された古墳（奥村 1986より）

にする意識をもっていたことは明らかであり、都城造営によって破壊された古墳は天皇の祖先とは関係ないと考えられていたという解釈を示している（王 一九八八）。

以上が七世紀末から八世紀後半にかけての都城造営に関連する古墳破壊の事例である。古墳の再利用の事例は八世紀から九世紀にかけて畿内を中心に数多く存在するが、古墳の再利用については、石部正志（石部 一九六一）や間壁葭子（間壁 一九八二・九二）による論考がある。このうち、間壁は「古墳再利用の実態を検討することで、古い古墳を再び利用した頃の社会が、古代の墳墓を、いかに認識していたかを知る手がかりが得られると共に、あるいは、こうした行為が、当時の社会の動向の一端を示す資料となり得るかも知れないと思うのである」（間壁 一九八二、五三頁）と述べ、八世紀～九世紀の古墳再利用について事例の集成を行っている。それによると古墳の再利用の事例は畿内、特に奈良・京都・大阪が中心である。古墳の利用場所をみると、墳丘が利用されている事例には大形古墳を利用した事例が多く、八世紀代に埋葬地（火葬墓）として利用された事例がほとんどである。また、露出していた横穴式石室が利用された事例は、奈良では古墳の再利用例十七例中、詳細不明三例を除く

と十三例（九二・九％）、京都では十二例中十例（八三・三％）、墳丘利用例の多い大阪でも八例中四例（五〇・〇％）と主体を占める。これらの再利用の目的としては、祭祀行為が行なわれていたと考えられる事例も若干存在するが、埋葬に関わるものが主体となっている。また、古墳が再度埋葬の場として選ばれた理由として、墳丘利用の場合は古墳がたまたま山野として利用され、墓地が形成された可能性が高いと考えられるが、古墳が築造された後わずか数百年という時期に古墳に関する伝承が途絶えてしまっていることは不自然である。特に横穴式石室利用の場合は、再利用の時点で石室が開口していたことを意味しており、たとえ伝承が途絶えた古墳であっても、その構造物が墓室であったことは当時の人々にとっても認識可能であったと間壁は推測している。その根拠として間壁は『今昔物語』二十八巻に雨に降られて「墓穴」に逃げ込んだ男の話をあげ、文中の表現からその「墓穴」が横穴式石室であったと推測される点をあげている。また、横穴式石室を再利用した動機として間壁は、単に墓地に適した空間であるから再利用したのではなく、それなりの理由、つまり血縁関係はなくとも古墳を積極的に利用したことで自己の出自を主張したり、その土地の古墓やその周辺地の所有権[6]を主張するための手段として古墳の再利用を図った可能性を指摘している。

これに対し、遺物の発見に関する記録も数多く存在する。その最も古いとされている事例が、『扶桑略記』巻五、天智天皇七年（六六八）の近江国崇福寺建造の際、銅鐸が出土したという以下の記事である。

七年戊辰正月十七日。於二近江國志賀郡一。建二崇福寺一。始令レ平レ地。堀二出奇異寶鐸一口一。高五尺五寸。

銅鐸についてはその特異な形状から出土記録が残されることが多く、平城宮造営の際に出土したという記録が『続日本紀』和銅六年（七一三）、『日本紀略』弘仁一二年（八二一）、『続日本後紀』承和九年（八四二）、『三代実録』貞観二年（八六〇）にみられる。また、銅鐸は「奇異な寶鐸」と記述されており、埋納されてわずか数百年後にも関わらずその用途が忘れられている点は興味深い。このような「過去」の遺物の発見記録は近畿地方だけでなく、各地に残る風土記にも多くの記載がみられる。例えば、『出雲国風土記』に「恵曇の池」の底に陶器等の類が多くあったという記事、『播磨国風土記』に「砥の堀」の名の由来が「砥を掘り出した」ためであるという

記事がある。また、『日向国風土記逸文』に土の中から「黒い物の頭部」が出土したという記事があり、それは埴輪の出土が伝承化したものであると解釈されている（斎藤忠 一九八八）。これに対し、石器については石鏃を中心に特に関心が高かった。『続日本後紀』承和六年（八三九）に出羽国田川郡西浜（現在の遊佐町吹浦海岸）で長雨の後石鏃が発見され、朝廷が異変を恐れて仏に修し神に幣を奉るよう勅を下したという記事がみられる。同様な記事は『三代実録』にも複数存在し、元慶八年（八八四）に秋田城内に石鏃が二十三枚降ったという記事がみられる。なお、出土記録が出羽国に集中する理由として、森浩一は元慶二年（八七八）の元慶の乱にみられる蝦夷の南下による緊張関係によると推測しており（森一九八二・九四）、石器天降の記載が九世紀中頃を中心とする約五十年間に集中する理由として、勅使河原彰は律令体制の解体期の政治社会の混乱に起因する支配者層の不安のあらわれと把えている（勅使河原 一九九五）。いずれにしろ、文献記録からみる限りでは発見された遺物は、土中に埋もれた「過去」の遺物が出土したという認識はなされておらず、天界から落下した神秘的存在や天変地異の前触れとして把えられていた。(7)

次に、「過去」の遺物が採集され、古代の竪穴住居址から発見されたと考えられる発掘調査事例が存在する。まず、岩手県北上市牡丹畑遺跡（北上市教育委員会 一九八九）のSK〇一四竪穴状遺構から出土した縄文時代の石刀の事例がある。(8) 出土した石刀は粘版岩製で長さ四〇・二センチメートル、幅四・〇センチメートル、厚さ一・五センチメートルで竪穴住居址の2層（床面直上の堆積層）から出土している（図3②）。この地域は縄文時代の遺跡が多く存在する地域であり、この石刀は古代人が採集して遺跡に持ち込んだ縄文時代晩期の遺物であると考えられる。次に、神奈川県平塚市神明久保遺跡の古代の竪穴住居址（一〇世紀）の竈支脚として使用されていた砂岩製の有頭石錘の事例がある。(9) 有頭石錘は弥生時代から古墳時代初頭にかけての漁撈具であり、この資料は古代に採集されて住居内の竈の支脚として再利用されている。牡丹畑遺跡の石刀については、その大きさから住居が廃絶され埋没する過程で土層中に紛れたとは考えられないこと、神明久保遺跡の有頭石錘については当時の竈の施設の一部として用いられていることから、ともに住居址廃絶後の堆積土壌に紛れていたものではなく意識的に採集された「過去」の遺物であることがわかる。

ただし、石刀の場合は、その形状から「異形の石」として採集されたと想像できるが、有頭石錘については竈の施設として再利用されているため、特に意識されず単純に支脚として使いやすい形状の石として採集された可能性がある。

（三）古代末～中世の遺跡・遺物観

古代末から中世にかけては、遺跡の発掘や遺物の発見に関する記録は少なく、文献記録から当時の人々が「過去」の遺跡や遺物をどのように捉えていたかについて探ることは困難である。その中で鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』巻六ノ二に「世尊寺ニ死者ヲ堀出事」という説話がある。「世尊寺に桃園大納言（藤原師氏）が住んでいたが近衛長官になったので宴会を催したところ急死し、この家を継いだ一条摂政（藤原伊尹）が天禄二年（九七一）に太政大臣になって宴会が催された。西南の角に堂を作るため塚を掘りくずしたところ「石の唐櫃」（石棺）が出土した。開けてみたところ、二十五・六の美しい尼が眠っているように横たわっており、金の坏をはじめすばらしいものが置かれていた。しかし、棺の中をのぞいていると突然、西北の方向から風が吹いてきて金の坏以外は塵となって吹き飛んでしまった」という内容である。これは、この時期に偶然古墳が発掘された状況が詳細に語られた事例として注目される。

また、古代末から中世にかけては、古墳が破壊され、副葬品が奪われるということが頻繁に起こった時代である。『古事類苑』帝王部十八に山陵（天皇陵）の破壊に関する史料が集成されている。それによると、康平三年（一〇六〇）に推古陵（『扶桑略記』）、同六年（一〇六三）に成務陵（『扶桑略記』）、久安五年（一一四九）に聖武陵（『本朝世紀』）、文暦二年（一二三五）に天武・持統陵（『明月記』）、嘉禎元年（一二三五）に天武陵（『百錬抄』）、文永十二年（一二七五）に柏原陵（『仁部記』）が暴かれたとある。また、弘安十一年（一二八八）には継体陵盗掘の犯人が捕まったという記録（『公衡公記』）がみられる。山陵に限らず、古墳が破壊・消滅する様子については、『徒然草』三十段に「古墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき」とあるように、水田や屋敷造成に伴って古墳が破壊・削平されることは珍しくはなかった。また、鎌倉末期から南北朝にかけて地中に埋もれていた「無主物」は統治権につながる国司・守護―「公」の管掌下にあったとする中で、悪党による塚（墓）

掘りがしばしば問題になったという記録もみられる（網野一九八七）。

これらの文献記録に対し、畿内を中心に発掘調査によって古墳が破壊されている事例が数多く確認されている。『高國記』に河内の守護、畠山尚順が安閑陵を高屋城として使用したという記載がみられるように、この時期には小古墳を破壊して城郭が築かれたり、大形古墳を利用して城郭が築かれる事例が存在する。大阪府高槻市今城塚古墳を利用して築かれた戦国時代城郭もその一例である（図5）。この点について畿内から九州にかけてこの時期の古墳の再利用について検討した石尾和仁は「自らの集団にとって

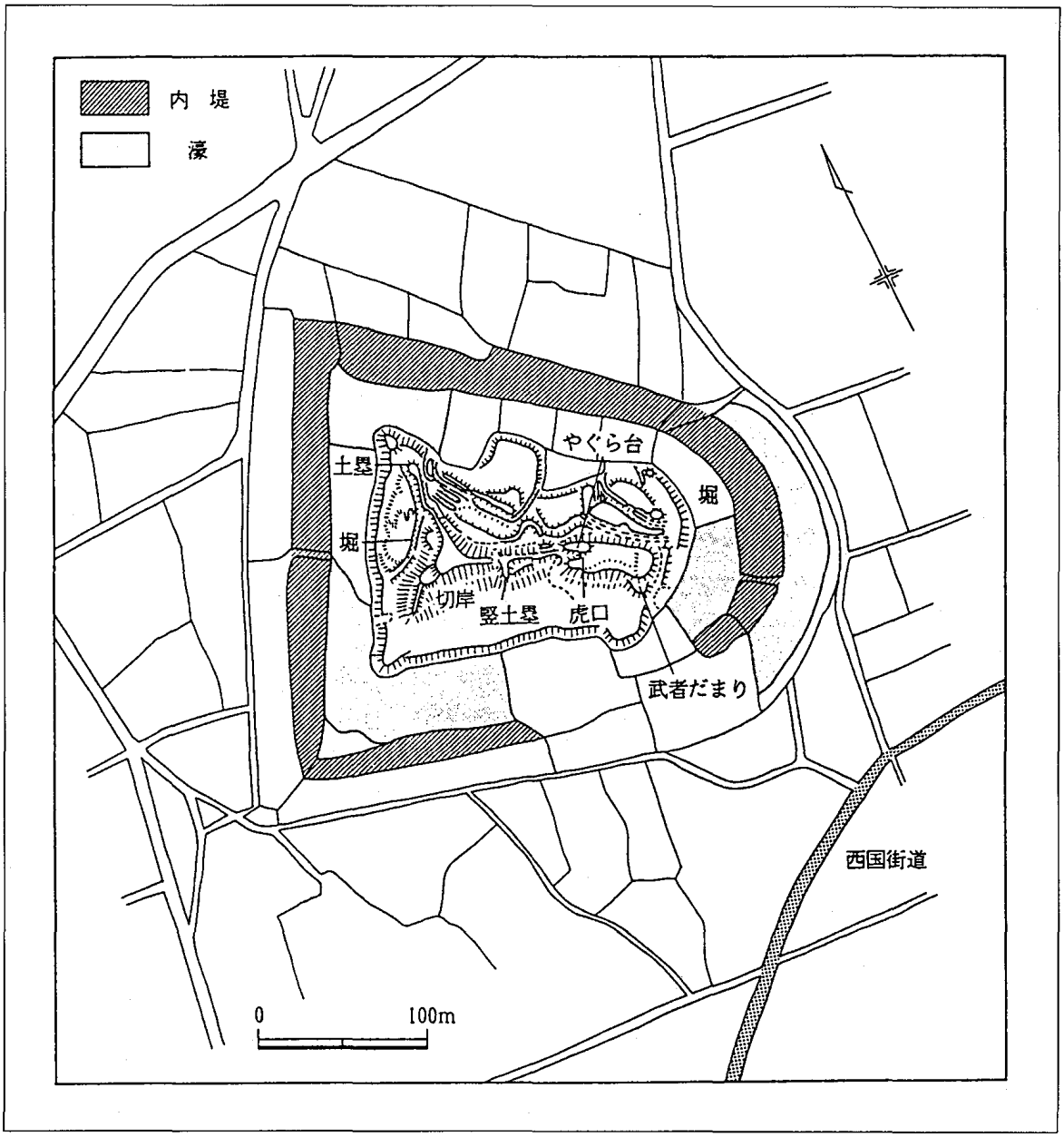


図5　城郭として再利用された今城塚古墳（石尾　1999より）

「記憶」の外におかれた古墳、地域伝承として語り継がれることのなかった小墳丘はもはや畏怖・畏敬の対象ではなかった」（石尾　一九九九、六二頁）としている。そして、中世前期には前代から引き続き墓が作られるのに対し、室町期以降になると村落共同体の再編にともない畿内の惣墓の形成にみられるような新たな墓域が形成されるとしている。

また、この時期には露出した横穴式石室を再利用する事例が畿内を中心に多くみられる。土井光一郎は奈良県の横穴式石室の再利用の事例を分析する中で興味ある指摘を行っている（土井　一九九二）。それによると、横穴式石室の再利用のされ方が、十二世紀前半段階では祭祀の場として使用されていたのに対し、十三世紀中葉段階以降は墓地として再利用されているという。その背景として土井は、前者の時期には在地性の極めて高い住人によって石室が祖先の墓であるという意識があったため、墓を暴いたという触穢に対する忌避作用により祭祀行為（追善供養）が行われたと推定している。これに対し、後者の時期には在地支配者（新興武士勢力）が侵攻したため、忌避意識のない新支配者によって墓地として利用されるようになったとしている。同様の見解は石尾によっても示されている。石尾は、在地の有力者が地域の権力者としての正統性を示すために古墳を再利用したとし、八・九世紀の古墳再利用についての間壁の指摘が中世においても適用できるとしている（石尾　一九九九）。また、関東地方の古墳の再利用については、斎藤　弘が一三世紀後半から一四世紀にかけて、有力階層が新たな造墓活動を開始するのに古墳や古墳群が選ばれ、それが庶民層に拡大したと述べている（斎藤弘　一九九九）。斎藤は説話や能などの例をあげながら、中世人にとって古墳は塚の概念で一括できる過去の遺体埋葬地である墓と認識されており、さまざまな伝説とも結びついた存在であったとしている。その背景として、古墳時代以来の葬送儀礼が断絶した後も古墳が遺跡として残ったため、その存在が常に意識されていた点をあげている。

これに対し、関東地方では中世のやぐらに古墳時代の横穴墓を再利用して構築された事例が多くみられる。例えば、鎌倉市内の極楽寺旧境内遺跡内やぐら群で発掘調査された二基は横穴墓を再利用したものである（極楽寺旧境内遺跡内やぐら発掘調査団　一九九五、極楽寺旧境内遺跡内横穴墓発掘調査団　一九九六）（図6）。極楽寺旧境内やぐら群の平成五年度一号窟は、玄室がバチ形を呈しており、

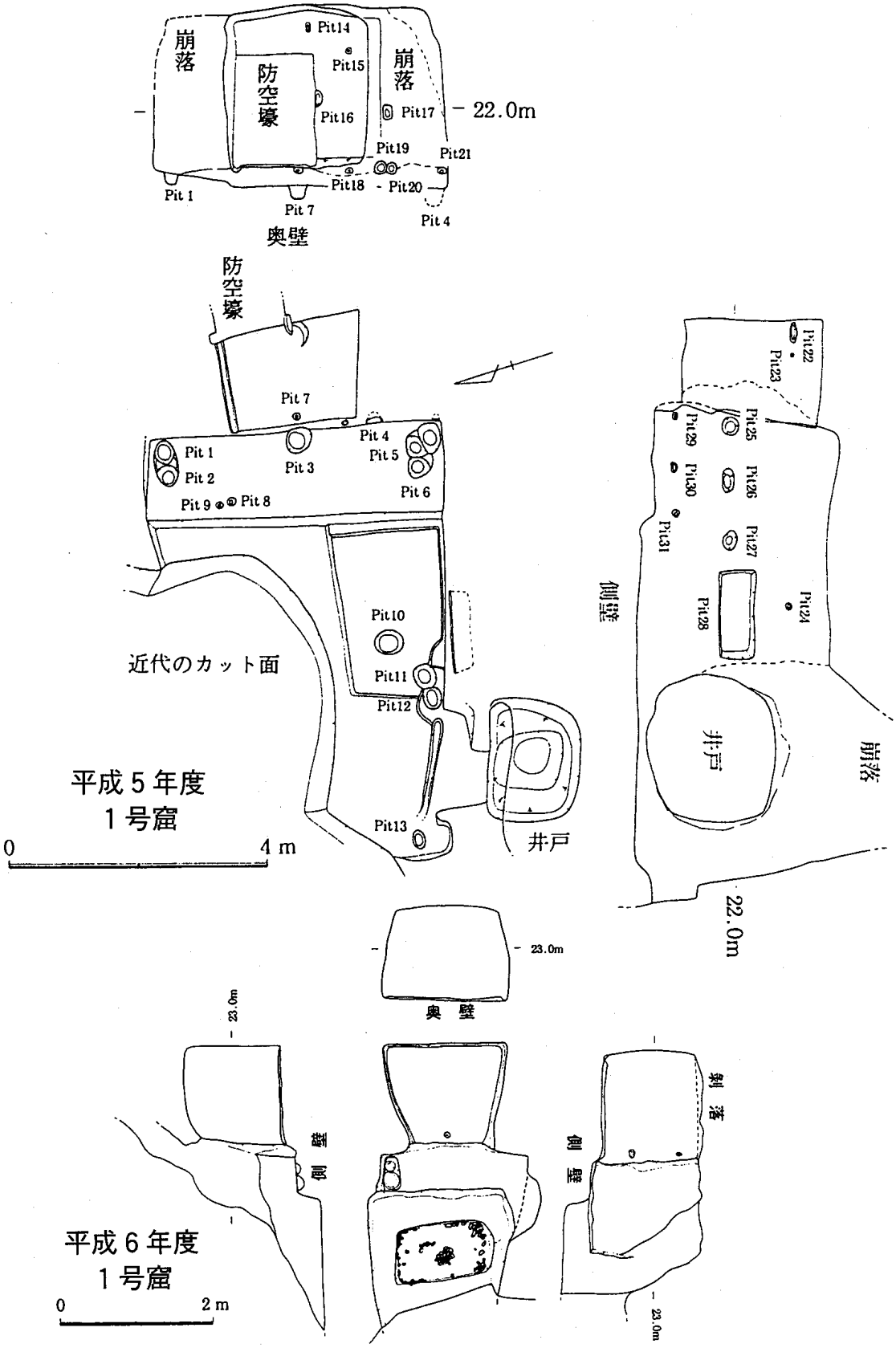


図６　極楽寺旧境内遺跡の横穴墓転用やぐら
（極楽寺旧境内遺跡内やぐら発掘調査団 1995・96）

横断面が本来アーチ状を呈していたものが長方形に削られている。なお、このやぐらは後に南側に井戸が掘られたり、第二次大戦中に防空壕の入口としてさらに再利用されている。平成六年度一号窟も玄室がバチ形を呈しており、同じく横断面が本来アーチ状を呈していたものが長方形に削られている。このように、やぐらはそのまま再利用されるのではなく、全体的に掘削改変されていたり、アーチ形の天井部が直線的に削りなおされている。横穴墓のやぐらへの転用例は鎌倉市内だけでなく千葉県内のやぐら群にも多くみられる。例えば、安房東部では、転用やぐらが含まれるやぐら群として、天津小湊町西蓮寺浦横穴、千倉町小松寺やぐら群、丸山町安楽寺やぐら群、善性寺やぐら群がある。その中でも丸本郷・珠師ケ谷周辺（温石川・丸山川中流域）に多くの転用やぐらが存在し、しかも他のやぐら群と比べて高所にあることから、やぐら構築の際に意識的に横穴墓を再利用したことが窺われる。その理由として糸原 清は、この地域を本拠地とする丸氏が古代以来の伝統的な在地領主であったことと関連を指摘している（糸原 一九九六）。つまり、横穴墓の被葬者が自分たちの先祖であるという意識があったため、意図的に同じ場所に墓を作ったというわけである。このような古墳時代の横穴墓のやぐらへの転用の問題は、やぐらの発生当初から存在したが[10]、横穴墓の人骨や副葬品はどのように扱われたかなど不明な点も多い。

いずれにしろ、古代末から中世にかけては、古墳が破壊され、副葬品が奪われるということが頻繁に起こった時期であった一方で、横穴式石室や横穴墓が墓地としての再利用される時期でもあった。その背景には、横穴式石室や横穴墓が自分達の祖先の墓であると認識されていたか、その地域の権力者としての正統性を誇示するために横穴式石室や横穴墓を積極的に利用した可能性があると複数の研究者が指摘している。

これに対し、当時の遺物観を探る手がかりは文献資料、発掘資料ともにほとんどみられない。ただし、戦国期には城郭の築城の際に古墳石室石材や墓石を石垣として再利用した例が存在する。例えば、『大日本史料』第一一編之五に大阪城築城の際に千塚古墳より石材を運び、大阪城の石垣として利用した記録がみられる。また、東京都葛飾区葛西城の本丸井戸から井戸の根石として放射状に置いた板碑群が出土し、井戸の石組には宝篋印塔の台座が用いられている（葛飾区郷土と天文の博物館 一九九九）。出土した板碑の年代から、この井戸は葛西城を攻め落と

図7　河内千塚の盗掘（『河内名所図会』より）

した後に後北条氏によって作られたとされている。このように、戦国期には本来の用途が何であるか認識したうえで古墳の石室石材や墓石である五輪塔や宝篋印塔、卒塔婆の一種である板碑を城郭の石垣や井戸の石組や根石に再利用していたことがわかる。

（四）近世の遺跡・遺物観

近世になると、近世封建制の確立や新田開発などによって、各地で新たな土地が次々と開墾され、それに伴って遺跡が破壊され、様々な遺物が出土する機会が増えてきた。また、この時期は好古趣味や弄石趣味の普及によって、勾玉や管玉等の奇石を掘り出す目的で古墳が盗掘・破壊されることも頻繁に起っている。その様子は寛政四年（一七九二）の伊勢崎藩士関重嶷の『発墳暦』や豊前小倉藩士石田道養の『篠舎漫筆』に記載されており、享和元年（一八〇一）の『河内名所図会』第五巻には河内の千塚の盗掘の様子が紹介されている（図7）。

これに対し、わが国初の本格的な遺跡発掘調査とされているのが、元禄五年（一六九二）の徳川光圀による栃木県上車塚および下車塚の発掘調査であるが、当時の人々が主に関心を示していたのは古墳であり、寛政頃に

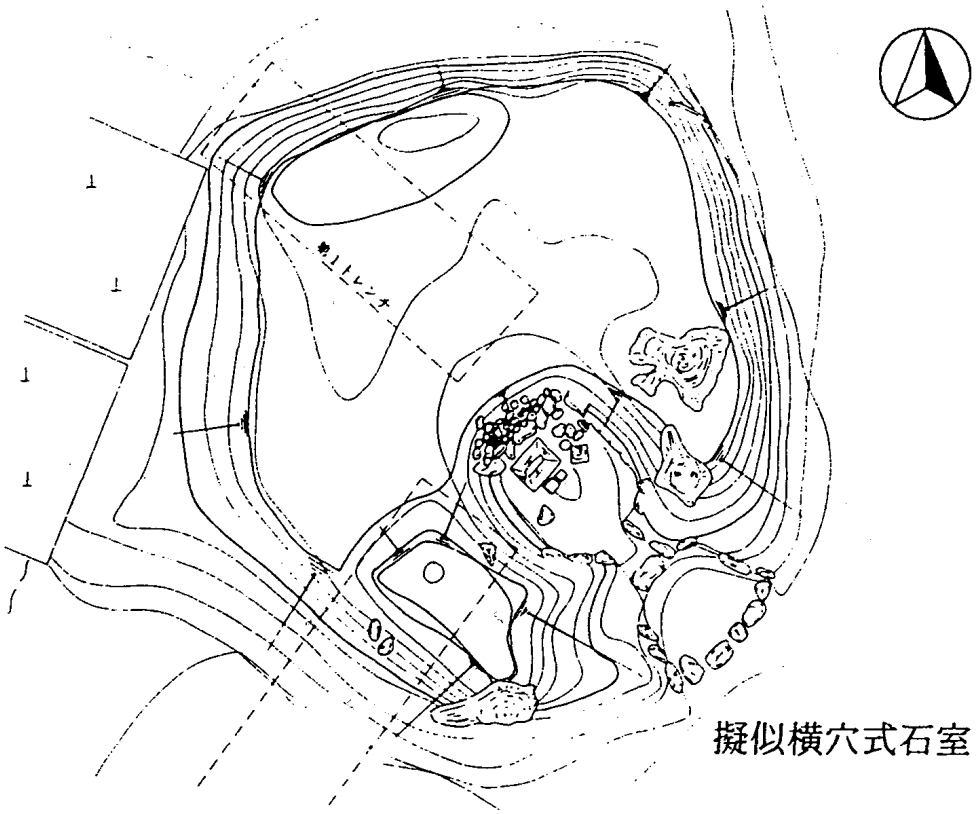


図８　群馬県渋川市真下塚古墳（斎藤弘 1999より）

なると知識人の考古資料に対する意識の高まりから、石室・石棺や副葬品に関する記録が増加する。清野謙次は、近世における古墳発掘記録や遺物出土記録の一覧を示しているが（清野 一九五五）、それによると記録は一〇六例に及び、地域的には九州から奥州にわたる四〇ヶ国にのぼっている。[11] その中で著名な事例として、天明五年（一七八五）に藩主毛利重就の小亭建設の際に石郭が出土し、その詳細を斎藤貞宜が『桑山古墳私考』に記した周防国佐渡郡桑山古墳、『古図類纂』に紹介されている寛政元年（一七八九）に発見された日向国諸縣郡本庄村の古墳、『観古集』に紹介されている寛政八年（一七九六）に発見された駿河国駿東郡上石田の古墳などがある。こうした中で、文献記録に残されていないが、一般民衆の古墳に対する意識の高さを示す興味深い事例が群馬県渋川市中村遺跡の真下塚古墳の事例である。真下塚古墳は中世には集落に伴う塚として認識され、土壙墓が掘られ五輪塔などの石塔類が多数造立されたが、近世になると石塔類が集められ横穴式石室状区画（擬似横穴式石室）が構築されている（斎藤弘 一九九九）（図８）。これは明らかに古墳の横穴式石室を模したもので、近世において石室が墓として認識されていたというだけでなく、実際の古

墳に擬似石室を構築して古い時代の石塔類を集めて納めた事例として注目される。

また、古墳の中でも山陵あるいは陵墓については元禄頃から強い関心を集めるようになった。その代表的な著作が『延喜式』以来の調査記録といわれる元禄九年（一六九六）の松下見林の『前王廟陵記』である。その後、蒲生君平は文化五年（一八〇八）の『山陵志』で陵墓八九陵を決定し、その立地や形状の変遷を明らかにしている。幕府はこの頃から幕藩体制維持のために天皇の存在を利用する目的で山陵の調査や修陵を積極的に行ったが、その中でも文久の修陵は陵墓は一〇〇陵に及んだ。[12] この流れは幕末の尊王運動に結びつき、明治期の陵墓認定の基礎となった。このように、近世後期以降になると本来陵墓という認識の薄かった一般民衆に陵墓という新たな意識が植え付けられることとなった。

次に、遺物に関する文献記録は、開墾などによって遺物が出土する機会が増えたことや遺物が学問的関心の対象となることによって、遺物出土に関する記録が増加している。例えば、縄文土器では、縄文土器発見の最古の記録と言われている元和九年（一六二三）の津軽藩の『永録日記』において亀ケ岡（亀ケ岡遺跡）から「瀬戸物」（土器）が掘り出され、三内村（三内丸山遺跡）から「瀬戸物」（土器）や「人形」（土偶）が掘り出されたという記載がみられる。亀ケ岡や三内丸山の土器や土偶については、文政七年（一八二四）の『耽奇漫録』や菅江真澄の『真澄遊覧記』（「新古祝甕品類之図」）にも紹介されている。また、寛政九年（一七九七）の藤貞幹の『好古日録』に京都市岡崎（北白川遺跡）から掘り出された「瓦器」として紹介された縄文土器が存在する。しかしながら、石器に比べると土器の発見記録は極端に少なく、紹介される資料は縄文時代後晩期の完形資料がほとんどであり、それらは壺や甕など「器」として認識されている。これに対し、縄文時代前期や中期など他の時期の縄文土器は器厚が厚くしかも破片で出土することがほとんどであるため、「器」として認識されなかったと推定される。このような出土遺物に対し、当時の学者や知識人は独自の見解をもっていた。例えば、十七世紀から十八世紀にかけて、石器[13]は自然現象によって生成したとする石器自然生成説がある。児島不求は寛永七年（一六三〇）の『天地或問珍』で天においては形のない雷が地表に落ちて斧などの様々な形になるとしている。同様に、西川如見は正徳五年（一七一五）の『怪異弁断』で雷が落ち

て沙石が融結して石器や斧などになるとし、後藤梨春は明和四年（一七六七）の『震雷記』で水蒸気とともに土や金石が天に昇って雷火によって磁器鋳物となったものが地上に落下したものであるとしている。また、自然生成説の中でも他の説とは若干異なり、雷の影響がみられない見解として、肥後の井沢長秀は正徳五年（一七一五）の『広益俗説弁』で石鏃は大雨で洗い出された天然のものであるとしている。このような一連の記載に対し勅使河原　彰は、従来の遺物に対する神秘性を排し、石器の生成を自然現象の一つとして理解しようしていることが窺え、「いまだに素朴ではあるが実証的にものをみようとする精神が生まれてきた」（勅使河原　一九九五、一七頁）と評価しているが、この時期の思想背景としての朱子学の存在を考慮すべきであろう。

これに対し、はじめて石器人工説を唱えたのは、新井白石である。白石は『白石先生手簡』享保十年（一七二五）の佐久間洞巌への書状の中で、国史（『続日本後紀』など）に石鏃の記述がみられること、国史に佐渡へ粛慎族が入犯したという記述があることから、石鏃は神軍によるものではなく太古の粛慎族の進入によるものであり、地中に埋まっていたものが雷雨によってたたき出されたものであるとしている。白石は石器人工説をはじめて唱えたというだけでなく、石鏃が太古の遺物であり、雷雨によってたたき出されたと解釈している点は注目される。同じく平秩東作は天明八年（一七八八）の『東遊記』の補遺である『莘野茗談』において、北海道の古墓（古墳）から石器が出土したことを根拠に石器人工説を唱えている。これに対し、清野謙次は「土俗学上の所見と発掘からの考古学的所見によりて石器人工説を唱道したのは卓見である」（清野　一九四四、一二五頁）と評価している。また、寛政五年（一七九三）の田村三省の『会津石譜』「上古は鉄なく石を鏃とするなり」とあり、石器が鉄器に先行するという素材変化に関する重要な指摘がなされている。これに対して勅使河原　彰は、田村が三時期区分法を用いた当時のヨーロッパの知識人と共通する認識をもっていたと述べている（勅使河原　一九九五）。このように、十八世紀後半以降になると学者や知識人の間では石器人工説が有力となってくるが、この時期には石器以外の遺物についても様々な記録が残されている。例えば、平田篤胤は『弘仁暦運記考』の中で銅鐸を紹介し、諸国の古塚や丘が崩れて出土することから、銅鐸が大国主神の頃のものでその後土中に埋まったり、塚に収めた

ものが出土したものであるとしている。銅鐸については、他にも寛政十二年（一八〇〇）頃に松平定信が編纂した『集古十種』などがある。

以上のように、十八世紀以降になると遺物に関する記述が増加するが、その背景として、国学の隆盛、国史や地誌の編纂、有職故実の研究が盛んとなってきたことや本草学が普及したことがあげられる。また、岩石・鉱物・奇石など全国の珍しい物産を持ちよる物産会が各地で開かれた点も重要である。物産会は宝暦七年（一七五七）に田村元雄が平賀源内らと江戸湯島で開くなど、江戸・大阪・京都などの都市で開かれている。文化八年（一八一一）から万延元年（一八六〇）の京都の以文会、文政七・八年（一八二四・二五）の江戸の耽奇会などが代表的な物産会である。このような都市で開かれた物産会や薬品会の存在によって一般民衆に遺物に対する関心が高まっていったと想像される。

このような遺物に関する研究や一般民衆の興味の高まりの中で次第に重要な位置を占めるようになってくるのが、木内石亭や藤貞幹などの商人層や町人層から出現した好事家と呼ばれる遺物愛好家の存在である。彼らは全国各地から遺物を収集し、それらを紹介した書物を数多く著している。このうち、全国の愛石家の集まりである奇石会をつくり「石の長者」と呼ばれた木内石亭は安永二年（一七七三）から享和元年（一八〇一）に出版された『雲根志』、天明三年（一七八三）の『曲玉問答』などを著した。藤貞幹は安永七年（一七七八）の『六種図考』、安永五年（一七七六）の『古瓦譜』、文化四年（一八〇七）の『集古図』などを著している。藤貞幹については、遺物収集に関する業績、たとえ破片であっても遺物を捨ててはならないという研究態度、国学の隆盛の中の天明元年（一七八一）の『衝口発』において、本居宣長に非難されながらも古代の言語・服装・祭祀などが「韓の影響」であると論じた点など優れた見識をもった学者として評価されている（斎藤忠 一九七四）。

これら当時の学者や知識人は、発見された遺物に対して自らの知識や立場に基づいた説明や解釈を行っている。しかし、それは当時の学者や知識人の見解であり、一般の町人や農民などの一般民衆は必ずしも合理的な精神に基づいた遺跡観や遺物観を示してはいなかった。例えば、当時一般に使用されていた石器名称には、雷・天狗・狐などの神秘性を帯びた存在と結び付けられたものが多くみられる。また、『雲根志』後編巻四に「此矢の根石を

所持する時は悪魔近よらず水に移していたゞけば瘧を落し鉄砲礫除等神のごとしと小児の守袋におさめ大人は刀脇指の目貫に用ひ此辺にて甚大切にする事なり」とあるように、遺物に関する知識のない一般民衆にとっては石鏃が神秘的な存在で魔除けとして使用されており、古代以来の神秘性を帯びた存在として石器が認識されていたと考えられる。このように、遺物に対面する機会が増えた近世においては、学者や知識人、好事家、一般民衆などの身分や立場の違いにより、遺物観が異なっていたことは容易に想像でき、近世になって遺物に対する合理的（科学的）な説明が可能になったという一方的な評価を下すことはできない。この点は、当時の一般民衆が遺跡や遺物と遭遇することにより、各地に様々な伝承や伝説が生まれたことからも肯ける。中でも古墳については、当時の人々は特別の意識を持っていたと思われ、その例としてあげられるのが古墳が墓であるという認識のもとに各地に残された古墳の祟りに関する伝承である（斎藤忠一九三一・一九九〇）。また、古墳が関わる伝説で著名なものとして、狐塚伝説や火塚伝説があげられる。墳丘に関連する狐塚伝説については柳田国男（柳田一九六九）が論じており、横穴式石室に関わると考えられる火塚伝説については大嶋善孝によって集成・検討されている（大嶋一九九四・九九）。このうち、火塚伝説は、「昔火の雨が降り人々が塚の中に隠れて難を逃れたため、その塚を火塚とか火の雨塚と呼ばれるようになった」というものであり、塚の名称は、火雨塚、火ノ雨塚、火の雨塚、火穴、火塚、氷雨塚、火ノ雨塚など様々である。その中には塚に埋められている宝を掘り出すと火の雨が降るなどという禁忌をともなう事例も存在するが、いずれにしろ露出した古墳の横穴式石室の存在が伝説生成の契機となったと思われる。

次に、伝説と遺物の関わりについて筆者は伝説の生成や補強に縄文土器が関わっていたと推測される事例について考察を加えたことがある（桜井一九九九）。まず、伝説の生成という観点では全国各地に存在する長者地名と縄文土器の関連ついて検討した。長者地名と遺跡の関連については、既に斎藤忠が論じており、長者地名が生成された原因として礎石等の建築遺構や土塁を留めていたり、瓦や土師器・須恵器等が出土している点をあげている（斎藤忠一九七六）。これに対して、筆者は縄文土器が地名の生成に関わった可能性を指摘した。具体的には、器厚のある前期や中期の縄文土器を多量に出土する

遺跡では、縄文土器片が長者の屋敷に葺かれた「瓦」であると認識され、長者地名を生成させる原因となったと推定した。実際、東北地方や北陸地方では長者地名の付く著名な縄文時代の遺跡は多く、時期的にも縄文時代前期から中期にかけての遺跡が中心である。全国に存在する長者地名と遺跡との関連については、既に中谷治宇二郎が長者地名の遺跡を集成し、近世における土器や土偶の発見地の分布と長者地名や土器地名の分布を比較検討している（中谷 一九三五a）。また、縄文土器片を瓦と誤認した事例については、清野謙次が実例をあげて論じている（清野 一九四四・一九五四）。次に、伝説の補強と縄文土器との関わりいう観点から考察を加えたのが、新潟県の山間部の寺院に伝わる大猫退治伝説と宝物館に展示されている縄文土器との関係である。天保年間に出版された『北越雪譜』に記載されている大猫退治伝説とは、この寺の和尚が天正の頃に近くの集落の葬儀に赴いた際に襲いかかってきた大猫（妖怪）を退治したという伝説であり、宝物館にはそれに関わる品々である「火車落の袈裟」や「大猫の頭骨」が展示されている。そのうち、「大猫の頭骨」は縄文時代中期の大木8a式土器の渦巻状把手部分であるが、上下逆さに置くことにより一見、動物の頭骨のように見える。このように、縄文土器の破片が動物の頭骨と認識されたことにより、大猫退治伝説を実証する「証拠品」の一つとして伝説を補強する役割を果している。[14] また、このように地中から掘り出された遺物が御神体として神社等に祀られる場合がある。関東地方や中部地方で神社や祠に祀られた縄文時代の石棒がその例である。東京近郊の神社に祀られた石棒については、坪井正五郎や若林勝邦によって武蔵國下石神井村、荏原郡上目黒村、葛飾郡立石村、南多摩郡新井村の資料が紹介されている（坪井 一八八六、若林・和田 一八八七、若林 一八八八）。このうち、下石神井村の資料は『武蔵野話』や『江戸名所図会』に登場する資料で、井戸掘りの際に石神が出土したとされ石神井の地名の起こりとなったとされている。上目黒村の北野天神社に祀られている資料も『江戸名所図会』に石剣として登場する。立石村の熊野神社に祀られている資料は寛政六年（一七九四）の古川古松軒の『四神地名録』に石剣と紹介されている（図9右）。新井村の資料は3つの村の産宮神として祀されている御神体である（図9左）。中谷治宇二郎は東京付近の石器を祀る社の一覧を提示しているが（中谷 一九三五a）、祀られている石器は石棒が最も多く、他には

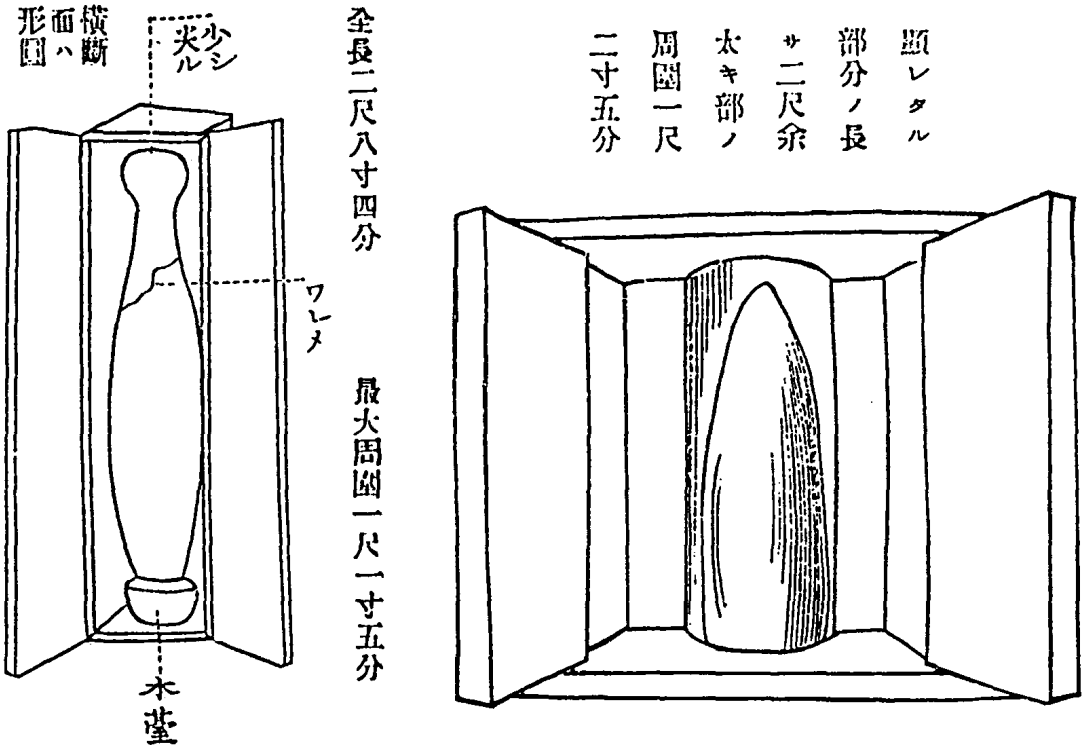


図9　神社に祀られた石棒（右：立石村，左：新井村　若林1888より）

石剣、打製石斧、磨製石斧、石皿、砥石がみられる。記録から遺物が出土した時期を特定することは不可能であるが、その多くは近世であると推定され、その形状から豊穣のシンボル、産土神として神社に祀られることが多かったと推定される。[15]

（五）近代の遺跡・遺物観

近代になると、明治元年（一八六八）の神仏分離令の布告による廃仏毀釈の影響や維新という社会変化に伴う古物を軽視する意識の蔓延によって、貴重な古文化財が破壊されるという状況が生じている。これに対し、明治政府は明治四年（一八七一）に「古器旧物保存」の布告を発し、祭器・古玉宝石・石弩雷斧・古鏡古鈴・銅器・古瓦をはじめ三一部門にわたる資料の保存を命じた。古墳についても明治七年（一八七四）に「古墳発見ノ節届出方」という太政官通達が出されている。また、この時期に一般民衆の新奇なものへの興味を刺激した存在として、明治五年（一八七二）から十年（一八七六）にかけて新しい風俗として流行した「博覧会」がある（石井 一九二九）。その内容は、政府の推進によって明治十一年（一八七七）以降開催された内国勧業博覧会とは異なり、近

世における物産会や薬品会、寺社の開帳などの流れを汲む見世物的性格が強いものであった。この傾向は、明治初期の考古学研究者にもみられ、彼らは基本的に近世における遺跡や遺物の研究方法を踏襲して研究を続けていた。その成果が明治六年（一八七三）の『石品産所考』、明治十年（一八七七）の松浦武四郎の『撥雲余興』、明治十二年（一八七九）の黒川真頼の『上代石器考』や『穴居考』などである。清野謙次は、こうした過渡期考古学者が存在した原因として、その世代の多くが新学校教育を受けなかった人々であったことをあげている（清野一九四四）。なかでも国史学者・美術史学者であるとともに「好古家」として知られ、明治時代初期の日本考古学界の中心的人物であったのが黒川真頼である。黒川はモースの大森貝塚の報告書の刊行と同年である明治十二年（一八七九）に刊行した『上代石器考』の中で、石器や金属器（銅器や鉄器）はともに神代に使用されたもので、金属器は貴族が使用し、石器は平民が使用したと述べるなど、近世の遺物観を踏襲しながら独自の説を展開している。明治十年（一八七七）にモースによる大森貝塚の発掘調査が行われ、近代考古学が幕を開けるが、モースにはじまる科学的な近代考古学は当初から理解された訳ではなく、モースの弟子達の努力により、徐々にわが国の研究者に根づいていった。ただし、清野謙次は、明治維新から明治二〇～三〇年代を新旧考古学の分離期として位置づけたが、明治二〇年代の新考古学の台頭は近世以来の旧考古学の成果を無視することとなり、結果として新考古学に不利益をもたらしたとしている[16]（清野一九五四）。

このような経緯を経て、わが国に近代考古学が浸透してきたわけであるが、勅使河原彰の学史区分（勅使河原一九九五）で「実証的研究の導入期」とされた大正期が実質的に研究者間に近代考古学が定着した時期であるといえる。例えば、考古学用語の点では、大正二年（一九一三）の高橋健自の『考古学』における用語分類にみられるように、矢根石や石磬を石鏃、雷斧を石斧、天狗の飯ヒを石匙とするなど古代以来の遺物名称が現在使用されている用語にほぼ統一されるのがこの時期である。これに対し、考古学という学問分野の存在が一般民衆に定着するにはいくつかの契機があったと考えられる。その一つが学校教育である。斎藤忠は明治時代の日本歴史の教科書の中で遺跡や遺物がどのように取り上げられているか検討しているが（斎藤忠　一九九〇）、それによると、

神話教育が重視される時代にありながら明治時代後半の民間の教科書の一部には、縄文時代の土器や石器、古墳や埴輪・副葬品などの古代の遺物についての記載がみられ、教科書には遺物の挿図も掲載されている。さらに、明治期にブームとなった地誌編纂事業も大きな影響を与えたと考えられる。中谷治宇二郎は、明治期以降の地誌（郡誌以上を対象とし町村誌は除く）の中に先史時代の記載がどの程度存在するかを検討している（中谷 一九二九）。本庄栄治郎の『日本経済史文献』に掲載されている地誌のうち町村誌を除いた合計が五〇三種であり、中谷の検討した地誌のうち先史時代の記載があるのが一九五種であることから明治期から昭和二年（一九二七）にかけて刊行された地誌にかなりの割合で先史時代の記載がみられることがわかる。中谷はこれを年次別に両者の増加率の比較を行っている（図10）。それによると、先史時代の記載がある地誌の増加率は、明治四〇年（一九〇七）以降増加しており、大正初期にやや停滞した後、大正八年（一九一九）以降急激に増加し、それ以降は過半数の地誌に記載がみられるようになる。このことは、この時期になると全国の郷土誌編集に携わる人々が先史時代に関心を持つようになってきたことを意味しており、明治

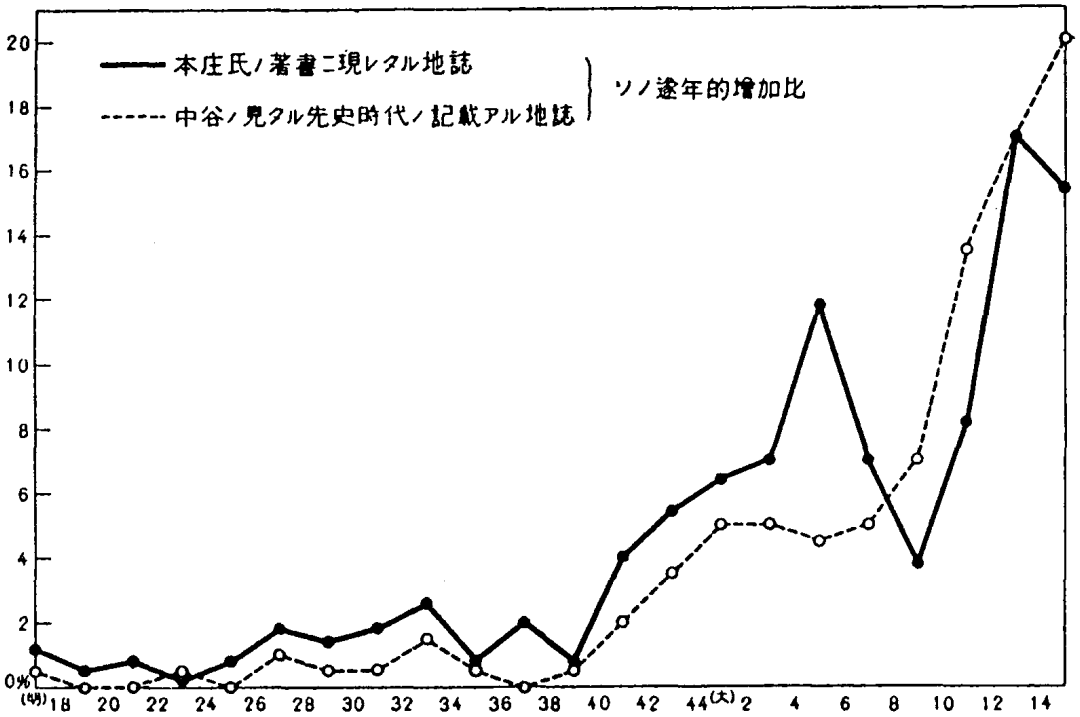


図10　先史時代の記載のある地誌の増加率（中谷 1929より）

末期から大正期にかけて日本歴史の中に先史時代という領域が徐々に受け入れられるようになってきたことを示している。また、考古学の普及という観点では、明治四四年（一九一一）、帝国議会に「史蹟及天然記念物保存ニ関スル建議案」が提出され、史蹟名勝天然記念物保存法が大正八年（一九一九）に公布されたことも重要な要素であり、明治末期から大正期にかけて遺跡や遺跡保存に対する意識が高まったことを示している。このように、現在の研究者に刷り込まれている「近代考古学」という言説が確立し、一般民衆が遺跡や遺物を珍奇で神秘的な存在と捉えたり伝説や伝承に結びつけるのではなく、歴史の中に遺跡や遺物を位置付けることが可能になり、考古学という学問分野が一般に浸透していった時期が明治末期から大正期であったことがわかる。

三　まとめ

以上、時代ごとに当時の遺跡観や遺物観を探る契機となる様々な事象について検討した。具体的には文献記録や各地に残る伝説をはじめ、発掘調査によって判明した「過去」の遺跡の忌避、破壊、再利用の事例、「過去」の遺物の採集や再利用の事例などである。ここではわが国の遺跡観および遺物観の系譜を追うことによって、過去の人々が彼らにとって異質な存在であった「過去」の遺跡や遺物をいかに捉えていたかまとめるとともに、遺跡観や遺物観を探る上で非常に重要でありながら、発掘調査報告書等に反映されることのほとんどない発掘情報の存在について論じてみたい。

（一）遺跡観の系譜

過去の人々の遺跡観を発掘資料から探るという試みは、ヨーロッパの巨石建造物やわが国の古墳のように当時の景観の一部を構成している構築物に関しては、それらの忌避・破壊・再利用の状況を知ることは比較的容易である。しかし、その他の遺跡や遺構については、堆積土によって覆い隠されるため「過去」の遺跡を忌避、あるいは破壊して新たに遺跡が形成されていても、それが意図的に行われたかどうかを判断することは難しい。その中で先史時代の事例としてあげた五反畑遺跡（安藤 一九八八）の場合は、地表に露出したと推定される「過去」の遺構（立石を伴う配石群や石棺墓群）を避けて新たな遺構（方形周溝墓）が構築されるという忌避事例が当時の遺跡観を知る手がかりとなった。発掘調査件数が多く、しか

も複数の時代の遺構が重なりあって検出される複合遺跡が多いわが国では、このような事例が数多く存在すると想像されるが、調査者や研究者が「過去」の遺跡の忌避や再利用というコンテクストで遺跡を把えることがないため、具体的に提示されている調査事例はほとんど存在しない。

古代の遺跡・遺物観を探る手がかりは、先史時代のように発掘資料だけに頼るのでなく、文献記録が有力な手がかりとなる。例えば、平城京造営にあたり古墳破壊の際の措置に関する『続日本紀』の記載があり、実際に平城京跡の発掘調査によって古墳破壊が確認されている。同様の事例は藤原京、恭仁京、長岡京造営の際もみられる。朝廷は古墳破壊による「たたり」を恐れていたと考えられるが、都城造営のためとはいえ古墳が破壊された理由として、破壊された古墳が天皇の祖先とは関係ないと考えられていたためであると王建新は推測している（王　一九八八）。また、古代には古墳の墳丘や露出した横穴式石室が再利用される事例が畿内を中心に存在する。間壁葭子は墳丘利用の場合は古墳がたまたま山野として利用されたとしているが、横穴式石室利用の場合は古墳を積極的に利用することで自己の出自を主張したり、その土地の所有権を主張するための手段としていたとしている（間壁　一九八二）。

古代末から中世にかけては、遺跡や遺物の発見に関する記録は少ないが『宇治拾遺物語』に当時の古墳の発掘状況が記載されている。また、この時期は、陵墓の盗掘が相次ぎ、開発に伴い各地の古墳が破壊された時代であり、『徒然草』にそれを嘆く記載がある。発掘調査によってこの時期に各地の古墳が破壊されている事例が多く存在することが確認されているが、石尾和仁は自らの集団にとって記憶の外の古墳や地域伝承が残っていない小古墳は畏怖や畏敬の対象ではなかったとしている（石尾　一九九九）。また、この時期は畠山氏が安閑陵を城郭として使用したように、大形古墳を利用して城郭が築かれる事例が存在し、大阪城築城の際に千塚古墳より石材を運び、石垣とするなど築城に際して古墳の石材や墓石を再利用した事例も存在する。さらに、この時期には露出した横穴式石室を再利用している事例も畿内を中心にみられる。土井光一郎は初期段階では在地性の高い住人によって石室が祖先の墓であるという意識のもとに墓を暴きの触穢に対する忌避作用により祭祀行為が行われ、その後は新興武士勢力によって墓地として利用されたと

している（土井　一九九二）。また、在地の有力者が地域の権力者としての正統性を示すために古墳を再利用した可能性もあり（石尾　一九九九）、この傾向は古墳時代の横穴墓を再利用して構築された関東地方のやぐらにおいても指摘されている（糸原　一九九六）。

近世になると新田開発等により新たに土地が開墾され、それに伴って遺跡や遺物に遭遇する機会が増えた。この時期は遺跡が盗掘・破壊され遺物が持ち出される一方で、徳川光圀による栃木県上車塚および下車塚の調査に代表される本格的な発掘調査が実施されたり、偶然発見された石室や石棺・副葬品の記録が残される時期でもある。さらに、この時期には古墳や露出した横穴式石室などの遺構の存在によって各地に様々な伝承や伝説が生じている。このうち、古墳に関わるものとして、各地に残された古墳の祟りに関する伝承、火の雨が降って塚（石室）の中に隠れて難を逃れたという火塚伝説や狐塚伝説などがあげられる。それ以外にも、礎石や土塁の存在や瓦などの遺物の出土によって生じた長者伝説などがあげられる。

このように、「過去」の遺跡の忌避・破壊・再利用の状況を検討すると、先史時代においては立石を伴う配石群や石棺墓群を避けて方形周溝墓が構築されたように、それが先祖の墓として意識されていたか異民族の墓として意識されていたかは不明であるが、「過去」の遺跡を忌避していたと考えられる事例が存在する。古代になると墓と認識されていた古墳に対して畏怖の念を抱いており、その点は文献記録にも散見される。それが、古代末から中世になると、古墳が破壊され副葬品が奪われることが頻繁に起こっていたことが文献記録や発掘調査によって確認されている。また、大形古墳を破壊したり、城郭として再利用するという事例や古墳の石材を城郭の石垣に転用するといった事例も多く存在する。これに対し、露出した横穴式石室や横穴墓を再利用される事例は古代から中世にみられるが、これは自己の出自や土地の所有権を主張するためであったり、権力者としての正統性を誇示するためであると解釈されている。いずれにしろ、この時期には祖先の墓であると認識されていなかった古墳や伝承のない小古墳は畏怖の対象ではなく破壊の対象となったと推測される。近世になると本格的な発掘調査が行われたり、発見された石室や副葬品の記録が残されるようになる。その背景には学者や知識人が考古資料に興味を示すようになったことや好古趣味や弄石趣味

の普及したことがあげられる。その一方で、一般民衆にとって古墳は畏怖の対象であるとともに古墳や露出した横穴式石室の存在によって各地に様々な伝承や伝説を生じさせる存在であったと推定される。このような時代による遺跡観の変遷については、既に紹介したホルトフ（Holtorf 1998）がドイツ新石器時代のメガリスのライフヒストリー研究の中で後期青銅器時代から古代においてはメガリスが「異教徒化？」し、中世から近代前期に「歴史化」したという遺跡観の系譜の問題を考える上で興味深い解釈を示している。わが国の場合も、古墳が直接的な先祖の墓として認識されていた時期から異民族あるいは異集団の墓として認識されていた時期を経て、歴史に組み込まれいくという流れが想定できる。

（二）遺物観の系譜

旧石器時代の人々が「過去」の遺物をどのように認識し、取り扱ったかといった旧石器時代の遺物観を探ることのできる確実な資料は今のところ存在しない。しかし、人類が古くから化石などの自然物を採集するコレクターであったことはルロワ＝グーランらによって指摘されている（Leroi-Gourhan 1964a・b, Shackley 1977, Pomian 1987）。その最古の例は、前期旧石器時代のアフリカのオルドヴァイ遺跡から出土した赤色黄土の破片と緑色溶岩の塊であり、中期旧石器時代以降になるとヨーロッパの複数の遺跡で化石や黄鉄鉱が採集されている。彼らはこれらの自然物を珍奇で神秘的な存在として捉えていたと推定されるが、わが国の場合、コレクターとしての旧石器時代人を想像させる事例は存在しない。縄文時代以降の遺跡では、当時の人々にとって「過去」の遺物が遺構内から出土する事例は数多く存在するが、それが意図的に運び込まれたのか、覆土に偶然混入したのかを判断するのは難しい。しかし、筆者が調査した慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の弥生時代末～古墳時代初頭の住居址の床面直上から出土した縄文時代草創期の有茎尖頭器については、採集された尖頭器が住居に持ち込まれた可能性が高いと考えられる。同様に、「過去」の遺物が意図的に古代の住居に持ち込まれたものと思われる事例として、岩手県北上市牡丹畑遺跡の縄文時代晩期の石刀、神奈川県平塚市神明久保遺跡の弥生時代の有頭石錘がある。古代においてはこのような発掘調査事例だけでなく遺物の発見に関する文献記録も多くみられる。例えば、『続日本紀』、『日本紀略』、『続日本後紀』、『三代実録』

には銅鐸についての出土記録がみられるが、そこで興味深い点は使用されていた時期から僅か数百年後であるにも関わらず既にその用途が忘れられている点である。その他『風土記』などに、土器・埴輪・石器などの出土記録がみられるが、その中でも石鏃については特に関心が高く、『続日本後紀』や『三代実録』に出羽国で石鏃が降ったという記載がみられる。古代においては石鏃などの石器については、神秘的な存在として把えられたり、天変地異の前触れなどとして怖れられていたと推定される。

古代末から中世にかけては、古墳の盗掘記録が多くみられ、開発に伴う遺物の出土も多かったと推測されるにも関わらず、当時の遺物観を探ることできる発掘調査事例や文献記録はほとんど存在しない。近世になると各地で新たな土地が開墾され、それに伴って遺跡が破壊され、遺物が出土する機会が増えた。この時期は学者や知識人が遺物に興味を示すようになり、遺物に関する関心が急激に高まった時期である。ただし、それぞれの学問的背景をもつ学者や知識人と遺物に関する知識の乏しい一般民衆とでは遺物認識のあり方が異なっていたようである。例えば、石器については、十七世紀には朱子学の影響から従来の神秘性を排し、石器の生成を自然現象の一つとして理解しようした学者が存在した。これに対し、新井白石は石器人工説を唱え、石鏃は神軍によるものではなく太古の粛慎族の進入によるものであるとしたが、十八世紀後半以降になると学者の間では石器人工説が有力となった。この時期には遺物に関する文献記録が増加するが、その背景として、国学の隆盛、国史や地誌の編纂、有職故実の研究が盛んとなったこと、さらに本草学が普及したことがあげられる。また、木内石亭や藤貞幹のように商人層や町人層から出現した好事家と呼ばれる遺物愛好家も重要な存在である。これに対し、遺物に関する知識の乏しい一般庶民は必ずしも合理的な精神に基づいた遺物観をもってはおらず、石鏃を魔除けとして使用したり、地中から掘り出された石棒などを神社等に御神体として祀るなど、遺物を古代以来の神秘性に満ちた存在として把えていたと考えられる。同様に、長者伝説にみられるように遺構の存在や遺物の出土が伝説を生成したり、特定の伝説に結び付けられるという事例が各地に存在する。近代になると、その初期には神仏分離令や廃仏毀釈の影響により古物を軽視する風潮があり、政府により厳しく管理された陵墓以外の古墳については副葬品の

盗掘が蔓延した。また、明治初期の学者や研究者は近世以来の研究方法を踏襲していたが、明治十年（一八七七）にモースによる大森貝塚の発掘調査が行われたことが契機となり、明治二十年代以降に科学的な近代考古学がわが国に浸透していった。地方の研究者や一般民衆に近代考古学が定着するのは明治末期から大正期にかけてであり、一般民衆が神秘的遺物観から離れ、遺跡や遺物を伝説や伝承に結びつけることなく、歴史の中に遺跡や遺物を位置付けることが可能になったのがこの時期である。

このように、先史時代において「過去」の遺物がどのように把えられていたかという当時の遺物観を究明する材料は乏しく、今後の事例の増加が待たれる。古代になると、石器を中心に「過去」の遺物が神秘的な存在として把えられたり、天変地異の前触れなどとして怖れられていたが、これが近世になると学者や知識人によって科学的あるいは合理的な説明が遺物に加えられるようになる一方で、一般民衆は遺物を神秘的な存在として捉えたり、遺物を伝説や伝承と結び付けていた。一般民衆が神秘的遺物観から離れ、歴史の中に遺物を位置付けるようになったのは明治末期から大正期のことであると思われるが、その背景には近代的制度としての学校における歴史教育や近代博物館の成立などいくつかの要因があったと推測される。

人類の歴史の中で遺跡観や遺物観の系譜を探ることは当時の人々の心性を探るという意味でも有意義な研究課題であるが、今後この問題を追及するためにはそれがすべて一般化できるものでなく、時代や階層など様々な状況に応じて多様性をもっていることを十分に認識する必要があろう。また、この研究をより充実したものにするためには、「過去」の遺跡観や遺物観を検討することができる発掘情報の増加が絶対条件となる。

（三）遺跡・遺物観の究明と発掘情報

過去の人々の遺跡観や遺物観を探る上で重要な情報となるのは発掘調査時の遺構の検出状況や遺物の出土状況に関する情報である。しかしながら、今までの発掘調査報告書ではそれらの情報が欠如していたり、不明瞭である場合が多い。例えば、遺構の記録に関しては、わが国では発掘調査において詳細な記録がとられ発掘調査報告書に掲載されるが、検出された遺構は時期別に報告するのが慣例となっているため、遺構の切り合い関係が生じている場合でも時期の異なる遺構の存在は強くは意識さ

れない。具体的には、その遺構よりも古い遺構については構築された場所が偶然重なったものと考え、その遺構よりも時期の新しい遺構については一種の「攪乱」と考えるのが一般的である。つまり、多くの調査担当者は既成の発掘調査システムに則った発掘調査を行うことが要求されるため、「過去」の遺構が意識されていたかどうか、意識されていた場合はどう把えられていたかなどといった疑問が生じることはない。

これに対し、遺物の記録情報に関してはより深刻な問題が存在する。現在わが国の発掘調査では、旧石器時代から近代に至る様々な時代の遺物に関して出土状況や出土地点に関する詳細な記録がとられている。それによって、ある時期の遺物の分布状況を正確に把握することができるが、後の時代に「攪乱」を受けたことによって遺物が移動している場合は、「攪乱出土」扱いとなり必然的に遺物の資料的価値が低下すると考えるのが一般的である。しかし、後世の「攪乱」の状況を遺物の接合状態を通して復元することにより興味ある分析を行った調査事例が存在する。東京都八王子市宇津木台遺跡群D地区では一八〇〇年以後に構築されたと推定される直径約二〇m、高さ約一mの富士塚が調査されたが、塚の下位に縄文時代の住居址等が検出していないにもかかわらず、塚の覆土に多量の縄文土器片（中期後半）が混入していた。縄文土器片の接合作業を行うことにより、塚の盛土の供給源は塚の南東側の畑地の区画溝を兼ねた根切り溝であったことが判明した。また、溝の掘削時の廃土が塚の盛土に利用されていたことがわかり、塚の築造が単独に企図されたのではなく周辺の畑地の開墾と同時に計画されたことが示された（渋江 一九八九）。このように、後世の「攪乱」から出土した遺物からも貴重な発掘情報が得られることがわかる。

この分析事例は近世遺構の覆土に縄文土器が混在していたことを利用して土の移動状況の復元を試みた事例であるが、過去の人々の遺物観を究明するという観点からは、「過去」の遺物を意識的に採集し、遺跡に持ち込んだ可能性のある事例を集中的に検討する必要がある。しかし、その研究の方向性を結果的に遮るのが、現在の遺物整理システムや調査担当者の遺物に対する思い込みである。発掘調査によって遺跡から出土した遺物は、洗浄・注記・分類・接合・復元・実測といった流れで整理作業が進行するが、ここで問題となるのは出土遺物の分類作業において時代別・種類別に分類された遺物が多く

の場合それぞれの担当者に預けられ、一定の分業体制のもとにそれ以降の整理作業が進行する点である。そのため、調査担当者が把握していた遺物の出土状況、つまり「過去」の遺物がその遺構に伴う可能性が高いという所見が伝達されないことにより、「過去」の遺物は「攪乱」出土の遺物として扱われる。これが重要な発掘情報を欠落させることになる。この問題は調査担当者がこの情報を省略せずに報告することによって回避できるが、そのためには、発掘調査報告書の体裁にこだわり、「過去」の遺物をすべて偶然紛れたものであるとする固定化した解釈[17]を行いがちな調査担当者の意識改革が必要である。

このように、現在の膨大な量の発掘調査報告書から「過去」の遺物の出土情報を得ることは非常に難しく、その情報を得るためには柔軟な発想を持つ調査担当者に遭遇するしかないのが現状である。実際、本稿で紹介した事例は調査担当者から直接得られた情報によって知り得たものであり、同様の事例は他にも相当数あると推定される。発掘調査から得られる様々な情報から「過去」の遺跡観や遺物観を探るという考古学の新たな研究領域を切り開くためには、研究者が慣れ親しんだ枠組みに固執せず、常に新しい観点から遺跡や遺物を観察してゆくとともに、一定のコンテクストのもとに考古学史を再構築してゆくことが必要である。

本稿の作成にあたり、鈴木公雄・阿部祥人・棚橋訓（慶應義塾大学）、稲野裕介（北上市立博物館）、明石新（平塚市立博物館）の諸先生・諸氏には多大な御指導、御教示を賜りました。記して感謝いたします。

註

（1）近代の範囲については、研究分野や立場の違いによって異なるが、考古学では明治十年（一八七六）のモースによる大森貝塚の発掘以降を近代考古学の時代として把えることができる。例えば、勅使河原彰の『日本考古学の歩み』（勅使河原　一九九五）では大森貝塚（一八七六年）以前の考古学を「考古学前史」として扱い、その後「近代考古学の黎明期（一八七七～一九一一年）」、「実証的研究の導入期（一九一二～一九二四年）」、「実証的研究の確立期（一九二四年以降）」、「戦後の日本考古学（一九四五～一九六一年）」、「日本考古学の現状（一九六二年以降）」と区分している。また、勅使河原は「考古学前史」を江戸時代以前の「神秘性の時代」と実証的なものの見方と西洋の自然科学への関心から遺跡や遺物を合理的に解釈しようとした時代、つまり江戸時代以降大森貝塚以前の「科学的な認識の芽ばえ」の時代に細分している。

この背景には科学的精神あるいは合理主義の芽ばえから定着という考古学の近代化への過程として近世という時代を把えようという勅使河原の立場が窺える。

(2) 遺跡や遺物の再利用については、「領有」(appropliation)という概念で捉えることができる。遺跡や遺物を特定の機能や構築・製作→使用→遺棄・廃棄という今までの固定化したライフサイクルで捉えるのでなく、「領有」という概念を取り入れていくことは、今後様々な慣用や解釈の可能性を広げるものである。

(3) 使用石材については、発掘調査報告書の刊行後に珪質頁岩ではなく硬質中粒凝灰岩であることが判明した。

(4) 報文の第一四表では出土位置が「床下」となっているが、正しくは「床面直上」である。この点については、遺物の取り上げ段階では「床面直上」となっており、整理作業が進んだ段階あるいは報告書の校正段階で「床面直上」から「床下」に変更されたと思われる。つまり、単純な誤植の可能性もあるがこの時期の住居址の「床面」や「床面直上」から縄文時代草創期の石器が出土する不自然さから出土位置が変更された可能性がある。

(5) 古墳以外については、貝塚についての記載として『常陸国風土記』和銅六年(七一三)に、巨人が海の貝を採って食べ、捨てた貝殻が積もって岡(貝塚)が形成されたという茨城県大串貝塚の巨人伝説に関する記事が学史上著名である。

(6) この問題に関連して、間壁は奈良時代末から平安時代前半頃の墓地に関する資料として、墓地買地券の存在を指摘している。それによると、墓地買地地券は中国の漢代以降続いた道教思想に基づく葬送習俗によって作られる架空の墓地売買証文で本人の墓に埋置されるものである。これの風習がわが国にも伝えられた。明確に墓地買地券といえる資料は二例のみであるが、その可能性のある板状の遺物が秋田県から熊本県にわたって全国で十三例出土している(間壁 一九八二)。

(7) 斎藤忠はこのような石器に付加された呪術的意味について、世界各地の民族事例を紹介しながら検討している(斎藤 一九三一b)。

(8) 北上市立博物館、稲野裕介氏の御教示による。

(9) 平塚市立博物館、明石新氏の御教示による。

(10) 赤星直忠はやぐら研究の初期段階から横穴墓との関連を指摘しており、たまたま開口していた横穴墓を利用して埋葬を行ったことが契機となって、鎌倉で山腹にやぐらを構築するようになったと述べている(赤星 一九四四・一九六六)。

(11) これに対し、古墳以外の遺構の発見記録は極端に少ない。青柳種信が文政五年(一八二二)に筑前国怡土郡三雲村で発掘された合口甕棺の出土記録を『三雲村古器図考』に報告している事例や平田篤胤の『皇国度制考』の中に文化十四年(一八一七)の洪水の際に偶然発見された秋田の埋没家屋についての記録がある程度である。

(12) これを象徴する出来事が、嘉永四年(一八五一)に成務陵などの陵墓を盗掘した十一名が逮捕され、磔など厳罰に処せられたという奈良の「帝陵発掘事件」(茂木 一

九九〇）である。

(13) ここでの石器とは、石鏃（鏃石、矢の根石、石砮）、石斧（雷斧、雷の撥）、片刃石斧（狐鉋石、狐鑿石）、石匙（天狗の飯ヒ）、石棒・石剣、独鈷石・石冠（神代石）などを指しており、現在の石器の器種分類からみると自然物としてはありえない整った形状の器種に限定されている。

(14) ただし、天保頃の『北越雪譜』には「火車落の袈裟」は記載されているが「大猫の頭骨」についてはまったく触れられていない。また、明治三十年代に瀧澤又市がこの寺の宝物について紹介しているが、ここでも袈裟については「火事落の袈裟一領」とあるが「大猫の頭骨」についての記載はみられない（瀧澤　一九〇一）。双方に「大猫の頭骨」の記載がないこととから、この縄文土器が出土し、宝物に加えられたのはこれ以降である可能性が高い。

(15) 地中から出土した遺物が神社等に祀られるという事例は、近代以降も存在する。例えば、銅鐸の鋳型破片が地蔵堂に祀られるという珍しい事例が存在する（大田区立郷土博物館　一九九八）。この鋳型は、大正五年（一九一六）頃に兵庫県赤穂市の千種川の河原で漬物石として採集されたもので、彫り込まれている模様が地蔵菩薩の光背、中央が頭部に似ていることから十年後に地蔵堂に祀られるようになった銅鐸の鋳型破片である。この資料は昭和五一年（一九七六）の調査で銅鐸鋳型であると判明している。

(16) 清野はその例として、江戸時代のアイヌの石器・土器使用に関する研究が踏襲されればモースのプレアイヌ説や坪井正五郎のコロボックル説は成立しなかった可能性があること、同様に鳥居龍蔵の北千島探検の評価もそれほどではなかったと考えられること、さらには弥生式土器は江戸時代に既に発見されていたことを指摘している（清野　一九五四）。

(17) 同様な解釈として、遺構の共時化の例が存在する。例えば、福岡県永岡遺跡の弥生時代の甕棺が二列埋葬墓地であり、なおかつ列を横断する小墓群に区分できる点について、春成秀爾は埋葬小群は居住集団を構成する「世帯」であり、出自規制が「双系的」なものであったと解釈している。しかし、溝口孝司はそれぞれの甕棺の時期を詳細に検討し、「世帯単位の墓域」と「二分原理の反映としての列墓群」という春成のモデルが成立しないことを指摘した（溝口　一九九九）。ここでは検出された甕棺のすべてが共時化され、その配列をもとに解釈を行うという誤りを犯したことになる。

〈引用・参考文献〉

赤星直忠　一九四四　「やぐらに於ける埋葬法に就いて」『考古学雑誌』三四巻八号
赤星直忠　一九六六　「中世墳墓の一形態としての「やぐら」」『日本歴史考古学論叢』吉川弘文館
網野善彦　一九八七　「境界領域と国家」『日本の社会史　第二巻　境界領域と交通』岩波書店

安藤文一　一九九八　「南足柄市五反畑遺跡」『第二二回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
石井研堂　一九二九　『明治事物起源』日本評論社
石部正志　一九六一　「歴史時代における古墳の再利用」『同志社考古』第一号
糸原　清　一九九六　「5、安房東部地区」『千葉県やぐら分布調査報告書』千葉県史編さん資料
石尾和仁　一九九九　「中世社会と「古墳」」『真朱』三号
岩波書店　一九九〇　『新日本古典文学体系四二　宇治拾遺物語・古本説話集』
王　建新　一九八八　「日本の古代都城造成の際なぜ大きな古墳を潰したのか」『古代学研究』一一八号
奥村清一郎　一九八六　「長岡京の造営によって壊された古墳」『長岡京古文化論叢』同朋舎
大田区立郷土博物館　一九九八　『製作工程の考古学』
大嶋善孝　一九九四　「火の雨塚のこと」『静岡県民俗学会会報』四十四号
大嶋善孝　一九九九　「古墳にまつわる伝説―火塚・火の雨塚について―」『信濃』五一巻一号
葛飾区郷土と天文の博物館　一九九九　『葛西城　中世の暮らしと戦を知る』
北上市教育委員会　一九八九　『牡丹畑遺跡』
京都府教育委員会　一九八〇　「長岡京跡右京第二六次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』
清野謙次　一九四四　『日本人種論変遷史』小山書店
清野謙次　一九五四・五五　『日本考古学・人類学史』岩波書店
黒川真頼　一八七九　『上代石器考』内務省博物局
慶應義塾　一九九二　『湘南藤沢キャンパス内遺跡　第二巻　岩宿時代・縄文時代Ⅰ部』
極楽寺旧境内遺跡内やぐら発掘調査団　一九九五　『平成五年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書　極楽寺旧境内遺跡内やぐら』
極楽寺旧境内遺跡内横穴墓発掘調査団　一九九六　『平成六年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書　極楽寺旧境内遺跡内横穴墓』
後藤守一　一九二七　『日本考古学』四海書房
斎藤　忠　一九三二a　「古墳の祟り」『ドルメン』一巻八号
斎藤　忠　一九三二b　「石器に付加せられた呪術的意義」『人類学雑誌』四七巻一二号
斎藤　忠　一九七四　『日本考古学史』吉川弘文館
斎藤　忠　一九七六　「長者屋敷考」『日本古代遺跡の研究―論考編』吉川弘文館
斎藤　忠　一九八八　『古典と考古学』学生社
斎藤　忠　一九九〇　『日本考古学史の展開』学生社
斎藤　弘　一九九九　「中世墓における古墳の利用」『HOMINIDS』vol. 2
桜井準也　一九九七　「系譜学としての考古学―近代化と遺跡・遺物認識の変化―」『民族考古』別冊特集号、慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室「民族考古」編集委員会
桜井準也　一九九九　「伝説の生成・補強と縄文土器―近世庶

民の遺物認識の一側面―」『メタ・アーケオロジー』創刊号
渋江芳浩　一九八九　「1、後世の土地利用による攪乱状態Ⅳ、D地区縄文時代の遺物とその出土状態」『宇津木台遺跡群XⅢ　一九八二～八四年（D地区）発掘調査報告書（4）下巻』八王子市宇津木台地区遺跡調査会
高橋健自　一九一三　『考古学』聚精堂
瀧澤又市　一九〇一　「瀧澤又市氏の考古的探検旅行の通信」『考古界』第一篇第五号
玉利　勲　一九九二　『墓盗人と贋物づくり　日本考古学外史』平凡社
千葉県　一九九六　『千葉県やぐら分布調査報告書』千葉県史編さん資料
坪井正五郎　一八八六　「下石神井村行白子行」『東京人類学会報告』第七号
勅使河原　彰　一九八八　『日本考古学史　年表と解説』東京大学出版会
勅使河原　彰　一九九五　『日本考古学の歩み』名著出版
土井光一郎　一九九二　「中世墓に対する一考察―奈良県内における古墳石室再利用の中世墓について―」『花園史学』一三号
東京帝国大学　一九三六　『大日本史料　第十一編之五』
長岡京跡発掘調査研究所　一九七九　『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第一集
中谷治宇二郎　一九二九　『日本石器時代提要』甲鳥書林
中谷治宇二郎　一九三〇　『日本石器時代文献目録』岡書院
中谷治宇二郎　一九三五ａ　『日本先史学序史』岩波書店
中谷治宇二郎　一九三五ｂ　「日本先史学と蘭学」『考古学』六巻八号
中谷治宇二郎　一九二八ａ　「明治以前の石器時代関係文献」『民族』三巻二号
中谷治宇二郎　一九二八ｂ　「石器に伴う説話の発展」『民族』三巻三号
中谷治宇二郎　一九三五　「神いくさと山のかみ」『ドルメン』四巻七号
奈良国立文化財研究所　一九六三　『平城宮発掘調査報告』Ⅲ
奈良国立文化財研究所　一九七四　『平城宮発掘調査報告』Ⅵ
奈良国立文化財研究所　一九七六　『平城宮発掘調査報告』Ⅶ
間壁葭子　一九八二　「八・九世紀の古墳再利用について」『水野恭一郎先生頌寿記念　日本宗教社会史論叢』国書刊行会
間壁葭子　一九九二　「八・九世紀の古墳再利用」『吉備古代史の基礎的研究』学生社
溝口孝司　一九九九　「考古学と空間的リアリティ」『空間へのパースペクティブ』九州大学出版会
源　了圓　一九七二　『徳川合理思想の系譜』中央公論社
三宅米吉　一八九七　「本邦に於ける史前及び旧辞時代考古学の進歩」『考古学会雑誌』一巻七号
三宅米吉　一九一七　「日本考古学発達の概略」『考古学雑誌』一七巻一二号
向坂鋼二　一九八五　「古墳の再利用」『転機』創刊号
茂木雅博　一九九〇　『天皇陵の研究』同成社

森 浩一 一九八二 「九世紀の石鏃発見記事とその背景」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ刊行会
森 浩一 一九九四 『考古学と古代日本』中央公論社
八木奘三郎 一八九八・九九 『日本考古学』嵩山房
柳田国男 一九六八 「木思石語」『定本 柳田國男集 第五巻』筑摩書房
柳田国男 一九六九 「狐塚の話（月曜通信）」『定本 柳田國男集 第一三巻』筑摩書房
柳田国男（監修） 一九七一 『日本伝説名彙』日本放送出版協会
吉川弘文館 一九六七 『古事類苑 帝王部』
吉川弘文館 一九七一 『古事類苑 植物部二・金石部』
若林勝邦 一八八八 「立石村ノ石棒、新井村ノ石棒」『東京人類学会報告』第一五号
若林勝邦・和田萬吉 一八八七 「荏原郡上目黒村ノ石棒」『東京人類学会報告』第八号
Bosinski G. 1981 *Gonnersdorf-Eiszeitjager am Mittelrhein.* 小野昭訳『ゲナスドルフ—氷河時代狩猟民の世界』六興出版。一九九一。
Bradley, R.J. 1987 Time Regained: the Creation of Continuty. *Journal of the British Archaeological Association* 140. pp 1-17.
Bradley, R.J. 1993 *Altering the Earth.* Edinburgh: Society of Antiquaries of Scotland.
Bradley, R.J. and Williams, H. (ed.) 1998 The Past in the Past: The Reuse of Ancient Monument. *World Archaeology* vol. 30
Clark J.D. 1975 Africa in Prehistory: Peripheral paramount?. *Man* 10.
Driscoll S.T. 1998 Picts and Prehistory: Cultural Resource Management in Early Medieval Scotland. *World Archaeology* vol. 30.
Gosden, C. and Lock, G. 1998 Prehistoric Histories. *World Archaeology* vol. 30.
Hingley, R. 1996 Ancestors and Identity in the Later Prehistory of Atlantic Scotland: the Reuse and Reinvention of Neolithic Monuments and Material Culture. *World Archaeology* vol. 28.
Holtorf. C. J. 1998 The Life-Histories of Megaliths in Mecklenburg-Vorpommer (Germany). *World Archaeology* vol. 30.
Leroi-Gourhan A. 1964a *Le Geste et la Parole.* 荒木亨訳『身ぶりと言葉』新潮社。一九七三。
Leroi-Gourhan A. 1964b *Les Religions de la Prehistoire.* 蔵持不三也訳『先史時代の宗教と芸術』日本エディタースクール出版部。一九八五。
Mithen S. 1996 *The Prehistory of the Mind.* 松浦俊輔・牧野美佐緒訳『心の先史時代』青土社。一九八八。
Pomian K. 1987 *Collectionneurs, Amateurs et Curieux.* 吉田城・吉田典子訳『コレクション 趣味と好奇心の歴史人類学』平凡社。一九九二。
Semple. S. 1998 A Fear of the Past: the Place of the Prehis-

toric Burial Mound in the Ideology of Middle and Later Anglo-Saxon England. *World Archaeology* vol. 30.

Shackley, M. 1977 Rocks and Man. 鈴木公雄訳『石の文化史』岩波書店。一九八二。

Tilley, C. 1994 A Phenomenology of Landscape: Places, Paths and Monuments. Oxford: Berg.

Tilley, C. 1996 The Powers of Rocks: Topography and Monument Construction on Bodmin Moor. *World Archaeology* vol. 28.

Williams H. 1998 Monuments and the Past in Early Anglo-Saxon England. *World Archaeology* vol. 30.